3 章　気象（ミーティア）——自然論

1. 気象と自然・風土

ヨーロッパの伝統的・キリスト教的思考では，神の創造による完全な秩序・宇宙は，始まりも終りもない，損われることのない形状，球体という形状をとるものと表象されてきた。月より上天は，天球として，秩序正しい，変わらざる宇宙であった[1)]。この地も，人が神の言にそむき呪われ[2)]，「神の前に乱れて，暴虐」[3)]に満ち洪水の罰を受ける以前は，完全な，美の，永遠の春の世界であった。堕落と洪水，罪と罰により，地上は，山々がそびえ，大小の岩石がおおい，深い谷と漫々たる海の，無秩序で，荒々しく，混乱した，不毛の世界となったとされる。雷雨や洪水，地震や火山といった大気と大地の動乱が，罪の結果としての地上の相を形作り，四季の変化を生み，今ある自然の景観と気象現象とを現出するに至ったと考えられて来た。従って，際立った自然と変化する気象は，堕落した世界を顕示し，渾沌と荒廃を表示するものとされて来た。それらは信仰の喪失の象徴でもあったのだし，神の力を顕示するものでもあった[4)]。

天空と大気と大地の変化の現象は，古典古代より *meteor* という言葉で表わされてきた。この語は，嵐，雨，雲，霧，稲妻，流星や天の川といった天体現象，地震や火山活動をも示していた[5)]。こうした，蒸気のような，不確かな変化の現象，とくに，霧や雲は，すでに述べたように，近代ヨーロッパの知的世界において，知を妨げるものとして受けとめられてきた。ミルトンにあっては，堕落の因たるサタンは，エデンを護る者の目をくらます夜の黒い霧の姿であらわれ[6)]，古代的な思考を妨げる蒸気の姿をとり[7)]，サミュエル・ジョンソンにあっては，中国からペルーへとひろがる世界を見ようとする人間の眼差しをさえぎるものとして霧や雲が現出している[8)]。霧によって，世界は見通しのきかぬものとなり，また，神からも遠ざけられる。むき出しの自然は雲や霧に覆われ，ときに，ブロッケンの妖怪を生む。しかし，そこに見えるものこそ，自己自身の投影された姿であり，想像力の世界なのだと，コールリッジは明らかにしている[9)]。知的に識別される自然に対比される幻想の霧の世界——両義的で，ほのかに現われるだけの世界がみつめられる。こうして，霧や雲は，視野の妨害者から，視線の先におぼろげに現われた対象へと変化してゆく。自然と人間とを隔つ現象は，一方では人間を自己へと返らせ——自己の像を反照して——，他方では，見なれた世界を幻想化し異質化する。ボードレールにあっては，霧は東方世界を現出する[10)]。こうして19世紀の詩人達の世界では，自らに返り，また，周囲を距離化させる現象として気象（ミーティア）がみつめられることになった。

想像力の世界で，詩作の世界で，気象が対象化され，また，自己の投影とされたとすれば，科学的発見の世界では，探求の対象にされてゆく。そのためには，自然に接近し，侵入せねばならない。しかも，常に対象化されて眼前に置かれたものでありつづける必要がある。従って，近代ヨーロッパは，自然そのもの，種々な形態をもち変化する自然に近づくための方法としての旅を

発達させてきた。美術史研究者のバーバラ・スタッフォードが，こうしたヨーロッパ人の旅と，その自然描写を明らかにしている[11)]。

18世紀の美学が，自然のもつ，粗野な，人の手の入らぬ，原初的な姿——山，砂漠，巨岩，密森，大河といったものが与える姿——にひきつけられ，崇高の美学を成立させていったことは良く知られたことである。南米からはフンボルトが，アビシニアからはロボ神父が——ジョンソンが英訳本を出していた——，インドからはウィリアム・ホッジスが，偉容の山姿，巨岩の風景を伝えて来るとともに，北の海や南の海，氷山や種々の島の相も，その広大さの中に置かれて描写され伝えられて来た。東方（オリエント）やアフリカの砂漠もヨーロッパ人をひきつけ，荒廃した姿，不毛の姿を与えて来た。こうした，人の手による作品を凌駕する「自然の傑作」に対して，とらえがたい束の間の自然現象も，近代ヨーロッパ人の知的好奇心をとらえていた。火山・溶岩流や流砂が地の流動する姿をあらわにし，地震という地の変動が自然の生成の力の所在を示しているものと，接近し直接に経験する人々は受けとめるようになる。その他の気象（ミーティア）は，例えば，18世紀にはルイ・コットによって次のように分類され，変りゆく現象の原理的な力が探求されていった。

(1) 水の現象——霧，雲，露，雪，雷，など。
(2) 大気の現象——風，嵐，竜巻，など。
(3) 火の現象——稲妻，鬼火，など。
(4) 光の現象——虹，幻日，オーロラ，など[12)]。

このように，自然にまといつき，その知を妨害するものとして知的対象から除かれがちの現象が，それ自体注目され，整理され，こうした現象を出現させるエネルギーが考察されるようになっていた。近代ヨーロッパの自然を探求する旅行者は，こうした現象の出現の瞬間に立ちあい，突然の現象の危険に立ちむかっていった。そして，旅行者によって，こうした現象の描写が企てられ，現象の美が認められるようになってゆく。気象との直接的遭遇は，自然の変容の美を生み出し，フリードリッヒやターナーの風景画を成功させていったことは明らかであろう。

こうした状況において，19世紀の中東旅行者も，種々の自然，気象に出会い，それを描写する。まずは季節の変化が指摘される。

冬は寒さ，降雪，雨季との指摘がなされる[13)]。アラビアでも氷がみられるとの言及がある[14)]。春はほとんど言及はなく，おだやかな緑のイェルサレムが強調される[15)]。そして，暑さの夏。ときに雨や露もみられる爽やかさが指摘される所もあるが，シナイやヒジャーズの暑さは健康に有害であることが述べられる[16)]。こうした有害な気候が病気を生むと理解されたことは，前章で述べておいた。中東の季節変化は，旅行者を，外来者を危険な状況に追いこむ。しかも，季節は時

の移り変りのみでなく，空間の移行においてもあらわれる。5－6時間の距離にあるイェリコとイェルサレムは，同じ時に，蒸し暑いエジプトの気候と晴朗にして清浄な大気のうっとうしさのない夏の気候を示していたと言われ[17]，シリアにおいては，北のヘルモン山に冠雪がみられる時期，東のゴラン高原は春の花におおわれ，南のゴールの谷（El Ghor）は周囲の山によって熱がとじこめられ，熱帯の太陽が植物を枯れ凋ませている，と描写されている[18]。

中東の季節の表出にあたって，しばしば露や霧は旅行者の注意をひいている。一つには眼や体への影響が配慮されて，他方では，風景の色調の変化によるその美しさに魅惑されてのことである。

12月，下エジプトのナイル・ボートの中で，暑い昼間の後，スコットランドの冬の如き夜の寒さを経験し，ウィルソンは次のように述べる。

> 霧をともなった，驚くほどの露がおり，キャビンの中に入り込み，火事かと思わせるほどで，（ 船 ）はすっぽりとつつみ込まれた。この独特な露こそ，聖書にしばしば語られたもので，降雨のほとんどないエジプトでは大地の植物を生きかえらせるものである。この地では特異な恩沢と受けとめられ，夜間重くおり，日の出にはすばやく消える露の雫は，その身をたまさかさらすことになるヨーロッパ人の体には，最も破壊的である[19]。

東方の気象の再生の力は，慣れぬヨーロッパ人には危険なものとして存在していることが強調されている。こうした気象も，峻厳なシナイの山にあっては，ターナーの絵にあるが如き効果を生むものと指摘されている。

> この日（ウム・ショマール山頂は）ひどくかすんでいて，ここから見えるはずの大パノラマの眺望は損なわれていたが，幻想的で優美な雲が，数百フィート下にただよい，神秘的な山姿が霧のヴェールを透してぼんやりと見え，（くっきりとした）風景が失なわれているのを補うに十分な，超自然の効果を生んでいた[20]。

こうした霧の，単色の効果は，紅海上の船中の旅人バートンには，多彩の効果となって現出する。

> **朝**——大気はイタリアの春の如くおだやかで爽快，海にそう谷には深い霧が流れ，岬には霞が真珠貝の如くかぶさる。遠くの崖は，巨人の作った城壁，聳え立つ塔，大きくはり出した稜堡，深く陰をおとした濠とみえる。その下を，アメジスト色の海が洗い，大地が日の出の最初の光を受けると，ほとんど透明な頂は碧玉の空の色とまざりあう。……すべ

ての者を足下に跪かせる獰猛なる敵（つまり太陽）は…空をオレンジ色に，紫色の水面に光を当てて海を「朱」に染め，情容赦なく，霧や霞を，天空にただよっていた瑠璃色の小さな塊の雲を追い払う。

真昼——白熱の山々の反射を受けて，石灰窯の衝風の如き熱風。すべての色は消えうせ，上空より灰白色になる。空は全くのミルク色を呈し，鏡の如き海は空の色をうつして，水平線は定かならず。……深い静寂の中，ただ帆のメランコリーなはためきの音のみ。人は眠るというより，半ば感覚を失ない，あと少しの熱で死に至ると感ずる。

日没——天空の半ばを覆う巨大な虹の天蓋の下を，敵は深い青色の海に没す。水平線近くには，褐色がかったオレンジ色のアーチがあって，その上に輝しい金色のアーチが（かぶさり），淡い青緑色の半円が重なって，漸次ほのかな層を作って，サファイア色の空にとけこんでいる。この虹を突っきるように，太陽はその光線を，美しいピンクの巨大な車輪の輻の姿をとって放っている。東の空は，かすむ砂漠と鮮明な山姿を際立たせて，あかね色につつまれる。……宵闇は急速にせまるが，黄道光が突然現われて，周囲の光景を呼びもどす。再び，灰色の山や荒々しい岩はバラ色や金色になり，シュロは緑に，砂はサフラン色に，海はライラック色のさざ波の立つ水面をまとう。1時間ほどで，再び，すべての色は消えうせ，月の光の下，崖はむき出しの，ぞっとする姿をさらし，荒涼とした白い懸崖や峰々に降りそそぐ月の光は，最も奇妙——最も神秘的だ。

夜——水平線は全くの暗闇で，海はその鋼鉄の鏡に夜の太陽の白い顔をうつし出す。上空には，藍色の波の上に際立つ，青白い光の巨大な柱が，その頭を無限の空間に消すようにして立っているのがみられる。……重くおりる露の雫が顔を覆って眠りにつくよう警告する[21]。

光と大気の作る色彩の変化，ターナーの描くような風景，つまりターナーレスクとの戯れが，こうした描写の中にみてとれる。危険なヴェールはそのままに，旅人は色彩の遊戯を死の危険の中で味わうこととなっている。

ターナーレスクとの出会いが旅人の心を占めているのは，それが期待し得ない場所でも顕著であると言える。エジプトやヌビアでナイルを航行する旅人にとって，「紫色や淡色や金色の，ターナーレスクの壮麗な景色」を目のあたりにするという期待はうらぎられることになる，とアメリア・エドワーズは述べている。そうした風景に欠くことのできない，「雲や蒸気といったアクセサリー」がこの地ではみられないからだ[22]。とくにヌビアで体験する熱帯の気候の美しさ，楽しさ，北からの風の心地良さは，静寂と荘厳さの中で，メランコリーに気分を暗くすることはないと言われている[23]。全くの乾燥の中で，色彩を散乱させる要素は大気に現われないということで

あろう。しかし，こうした，晴朗にして清澄な気候においては，自然はそのむき出しの姿をあらわす。旅人が言及していたように，そこは死に近づいた世界を予想させる。砂漠や石化の土地は，生命を死に導く世界として，旅人の前にあらわれるに至る。しかも，むき出しの自然は，荒々しい気象をさそい出す。そうした自然の中で，気象はその力を十分に発揮する。

2．幻の姿と音

地平線や水平線に現われる，幻の現象，蜃気楼は，古くより知られ，シチリアとイタリア半島を分けるメッシナ海峡のそれは，ヨーロッパ人にとっては著名なもので，17世紀のイエズス会士ジャルディーナは，宮殿，森林，庭園，人々，動物といった，ゆれ動き様々に姿を変えるものでにぎわう，カレイドスコープの舞台の出現をながめていた。もっとも大海原の上では，戯れの現象は危険な模像となって現われていた[24]。

中東の乾燥した空間にあっては，蜃気楼は欺きの水として現われる。多くの旅行者は，そのみせかけの外見の「欺き」を強調する。すでにみたように，中世以来，イスラーム教を偽りの宗教，キリスト教に外見上は似ているが全く異なった宗教と表現してきたように，キリスト者である旅行者は，この地に現われる蜃気楼を，「何の現実性もない」[25]が，「現実にあるものと奇妙な類似」[26]をまとい，多くの旅人をあざむいて来たものであると表現している。

> 岸辺が巨大な葦と優美なポプラで縁どられた広大な湖が，ほとんど平地を覆っている。その湖面には多くの島が浮かび，水面を波立たせるそよ風にゆれる葉をつけた木々に覆われている。島のつき出た所や上の所には，草木豊かな庭園や果樹園にかこまれた村々がみられる[27]。

> （蜃気楼の湖）の色は，全くまざりっけのない瑠璃色で，非常に澄んでいて，地平線を縁どる山々を非常な正確さで反映し，一面の水という惑わしはなおさらに完全に為されていた[28]。

> ラクダにのったアラブ人がそこを通ると，日の光の中長くのびた影が湖の水面に落ちる。そのうちの一人が，ラクダからおり，地面に腰をおろし，ラクダは砂漠の草を食んでいたが，これは全くの幻影であった[29]。

自然はその現象の中に，この中東の地で，偽りの模倣を生んでいた。偽りの姿であることが分かっ

ていても，その模倣の完全さが旅人を誘う。ちょうど，偽りのモスレムが，女を使って欲望をかきたたせ，模倣の宗教に誘った如く，旅人を幻想の水へと誘うことが語られる。

> 全く湖や川に似た欺きの姿を示す……蜃気楼は，ひどく乾燥した砂漠とは奇妙な対照をなしていて，よく言われているように，多くのみじめな放浪者を，しばしば著しく欺くにちがいない。そこには水はないのだと気づいていないと，そのみせかけの姿を本物と見分けるのは実にむつかしい[30]。

> （蜃気楼が全くの欺きの現象であると）気づいていながら，私自身欺かれたのは事実だと告白しなければならない。水に完全に似ていることと，水への強い欲求が，欺かれるなというすべての用心にもかかわらず，自分の見たものが本当に水なのだと確信させた[31]。

干涸び，乾燥した地にあって，水は人を生きかえらせる。中東の地にあって，ときに，水は絶大な力をもつ。その姿をまとって，中東の自然は，侵入する旅行者を，その力の下に屈服させようと迫る。ヨーロッパ人の表現において，その惑わしは，イスラーム教徒の使うパラダイスの誘惑に比較されよう。偽りの地は，自然の現象の中に，模像（シミリチュード）を作りあげて，それはマルコ・ポーロの説く山の老人の誘惑の世界，一夜の夢想に重なるように思われる。模像は，前に述べたように，マホメットの詐欺のトリックである，とされてきたものであった。彼の降霊術の伝受者のようなエジプトの降霊術師は，多くの旅行者によって訪問され，その術の失敗が報告されている[32]。そうした中東の呪術の効力を，旅行者は蜃気楼にみているように思われる。水と欺く蜃気楼は，「目と太陽光線との間に炎を置いたときに見られる，一種の透明な霧」[33]こそが真の原因であるとされ，その力は「呪術作用」[34]とか「呪術効果」[35]という言葉で言及されている。透明な蒸気のスクリーンにうつし出された，呪術師（マジッシャン）の業が，蜃気楼への言及の中に想定されよう。この自然の模像を作る業がみやぶられ，はぎとられると，自然はあるがままの姿を旅行者の前にあらわす。

> ほどなく，昇る朝日は草や木の葉を覆う露を消し，その光に照らされた遠くの丘は，平地の森にそびえる，巨大な，金箔をはられたドームのように見える。……日が進むと，雲も消え去り，地平線の丘や山は，澄んだ青空にくっきりと浮かびあがる。……大気は水晶のように透明で，夏の熱気によって平地にゆらめく霞を束の間の降雨が追い払い，蜃気楼の呪術的効果で，陽に焦された大地が，「中に緑の島」を置く静かな湖に変わるということはなかった。事実，自然は，そのあるがままに現われていた[36]。

それ故にこそ，蜃気楼は，「何の現実性もない」「一枚の絵」であり，「東方を旅するものによってのみ充分に理解される」美しい風景[37]——気象（ミーティア）の風景画として評価されている。その偽りをみやぶる眼を持つ人間こそが味わうことのできる美ということであろう。

中東の幻は，ヨーロッパ人の旅行者の目に現われるのみならず，耳にも達する。そうした幻の音は，19世紀の旅行者に，中東の壮麗な幻影・幻想の生と死を知らせている。

上エジプトのテーベ，ナイル西岸，死者と祭祀の場に，一対の巨像が立つ。すべてが倒壊し，砂漠の中に孤立している，この二つの巨像はメムノンの巨像と呼ばれ，その不思議な音で古代より著名であった。ハープの糸を断つときの音，あるいは，金属的な響は，ローマ皇帝ハドリアヌスを現地にひきよせていた[38]。ギリシア人はこの像にエチオピア王メムノンの名を与えてきた[39]。

19世紀の旅行者の多くは，この不思議の音にひき寄せられるものの，音を聞くことはない。その子メムノンの死を悲しんでオーロラがその涙の雫を注ぐと，朝毎にあいさつを送ると言われたメムノンの巨像は[40]，近代ヨーロッパ人には黙したままである。東の空のオーロラの「最初のほほえみ」[41]にメムノンはおし黙り，旅人の期待をうらぎる。従って，古代都市の空に鳴り響いた音を想像する他はない。その「見えざるメロディー」[42]は，「夜のうちに冷やされた岩石が急激に暖められ，岩の小片が砕けはねて生む，明らかなふるえるような音」[43]であり，「日の出の太陽による急激な温度変化によって作られた，岩のさけ目を，浄化された空気が通過する」ことによって起こされる音である[44]と想定する。バートンはミディアンの地で，レンガ色の漂石の石塚がメムノン風の音を出すことにふれ,アーサー・エヴァンズがダルマティアで経験した音に比べており[45]，ウォーバートンはメムノンの音を，アレクサンダー・フォン・フンボルトがオリノコ川で耳にした岩石の発する音に比べている[46]。このように，世界の各地で類似の音は経験されるにせよ，ここでは古代の音は遠のいているわけで，スティーヴンズはメランコリーな気分にひたることになる。

> ああ悲しくも，その音はメムノンを去った。魂は逃げ去り，（ 巨像は ）荒廃した墓の中に巨大な骸骨として立つ（ にすぎず ）[47]。

人の手になる彫像に，自然が神秘の命の音を与えていたが，今や，その古き魂は像から去って，旅人は死骸をながめているにすぎない。命の失なわれた廃墟に，19世紀の旅行者は立ちつくす。そして，この自然の作り出す音の消滅がいかなる原因によるのかと問う。一つには紀元前27年の地震，あるいは，ペルシア帝国のカンビセスによって破壊されたと述べられる[48]。自然の力か人の手によって，古代の命は失なわれたことが確認される。暴虐の中東というイメージは，その自然の力，自然現象の表現においても，その姿を現わしているとみることができる。もちろんここ

では，それは，メムノンという人の手になる巨大な彫像を命あらしめる自然の力を，破壊するものとして姿を現わしていると読みとれる。

メムノンの音は人工物から現われる音であった。それが自然現象による音であるとしても，像そのものは人工物であり，その音の消滅は古代の文化の命の消滅に関わるものとみられた。しかし，旅行者自身が比較対象として挙げたものにみられるように，自然物自体も幻想的な音を出す。そうしたものの中で，著名なものの一つは，流砂による鳴動——あるいは，鳴き砂——であろう。中東では，シナイ半島の西海岸，鐘の山（ジェベル・エル・ナークース）[49]の流砂の音が知られている。

この砂の山は，砂岩の山で，細かく乾燥した砂が，ちょっとした力で流れ出し，はじめは「低く震え響く，うめきのような音」が出，次第に大きくなって「雷鳴のような轟き」へと変化する。「その音は，金属性の容器の口に空気が入り込むときに出る音のようだ」とパーマーは述べている。この山の音についてはアラブ人の伝説があって，幻影の修道院が存在していたこと，それが消えうせて鐘の音が残ったことが伝えられている，とパーマーは紹介している[50]。砂漠の中での幻想的な音，それが鐘の音に聞こえることは良くあるようだ。キングレイクは生まれ故郷の教会の鐘の音を砂漠の中で耳にし，それが幻聴であると述べている[51]。静寂の中の，生命の欠如した世界は，幻の音を生み出している。人工物の音の消滅がその死を想像させたように，砂の音は死の静寂に人を誘う。この誘いにのって，砂漠世界についての旅人の言葉をみてゆくことにしよう。

3．荒廃の風景

i　神の怒りの風景

美術史学者のバーバラ・スタッフォードが述べているように，18世紀ヨーロッパの科学的探求の旅人にとって，自然はそれ自体として，人の手を離れたものとして理解されるべきものであり，人工の芸術品に優越する自然は，その連続する差異において理解されるべきであって，その生成を見るべく接近すべきものであった。自然とその生成は，塊（マス）——巨岩や氷山や高山——，核（コア）——洞窟——，広がり——大海の島々，コースト・ライン，広野——，それに渾沌とした荒廃——ジャングル——といった相のもとに観察されていた。こうした自然の相は，その細部にまで名ざされ，観察され，自然の生成力が把握されていた[52]。

こうした自然の相の中で，荒野，広野は，自然の生成の広大なひろがりとして理解され，注目されていたわけであるが，その中で，砂漠（デザト）は[53]，「徹底的にむき出しにされた，荒廃の環境」として，その極致（アクメ）にあるものであった。砂漠は，一様に不毛な蒸発の土地で，乾燥と水分の蒸発に

よって生成された，水を欠いた，熱風吹きすさぶ無慈悲の広野で[54]，さえぎるものも，出会うものもない，人間の時間とは無縁の，始まりも終りもない無限世界であった[55]。その絶対の静寂，死の静寂は，世界のはじまりの光景に一致するものと把握されていた[56]。

19世紀の中東旅行者は，こうした砂漠の相を，「塩の海」「アスファルトの海」「アラバの海」と名づけられた，死海とその周辺，さらに，南に広がるアラバの谷（El Araba, Wadi Araba）にみることとなる。このあたりの土地に与えられた，聖書のアラバという語は，乾燥した荒野・砂漠を意味していた[57]。この荒野・砂漠は「自然の激烈な動揺によって揺り動かされ，混乱した山にかこまれ」[58]，「恐ろしく崇高な，深い淵，あるいは，峡谷」[59]をともなう，「淡い黄色の，不毛の，なにもない山々のつらなり（がつくる）壁」[60]の間に，「雲（にさえぎられることのない），強烈な太陽光線にさらされた，深い大釜（の底）」[61]といった状態で置かれている。太陽は，この「荒涼とした荒野に，焦すような，枯れ凋ますような熱を注」ぎ，ウォルター・スコットが『タリズマン』の巻頭に描き出した光景をあらわにする[62]。この美しくも恐ろしい，「荒廃の悲しげな絵画」[63]の中に，「溶けた鉛の海の如く動きがない」「死んだような」姿をした死海が横たわる[64]。

> 深い沈黙は死の如く恐ろしく湖面を覆う。その時激しい雨をともなって吹く風に，よどんだ水はゆっくりとうねり，それが立てる音は，その岸辺の荒廃（した姿）よりも，ぞっとするものであった[65]。

空が曇ると山々はかすみ，その「風景を，できる限りの，荒涼とした単調なものにしていた」[66]。死海は死の静寂の中に沈みこみ，昆虫の羽音もせず[67]，貝殻やバッタの死体の他は，「生命（の存在を）知らせるものはなく」[68]，「死海の上を通る際に死滅した多くの生物の死体がみられることは，「生物は，無事に（死海）を越えられない」という古代の伝説を本当らしいものにしている」[69]と考えさせる。

> （ここには）死そのものの恐ろしい醜さから，真実，その屍体を包んでいた白布を持ちあげてみせたような，恐るべき荒廃の光景（が広がる）[70]。

そして，この死そのものの世界の南に，アカバ湾へとむかう，アラバの谷が広がっている。この「恐ろしい砂漠」[71]の「砂の谷」[72]，「砂地の丘，トゲのある灌木，（奔流で）掘られた峡谷，涸れた川床」[73]は，古代の知識人には知られざるものであったらしく誰も言及していない谷であり，1812年８月にブルクハルトが初めて訪れて記述し，1818年に地理学者カール・リッターが言及したものであった[74]。聖書にしるされながら忘却されていた荒廃の世界が，19世紀の旅人の手によっ

て明るみに出されたことになる。しかし，この谷は，神の怒りの結果として理解された。

> 地質学者として，荒涼とした（この谷の）道を進む旅人にとって，その一歩一歩が，自然という偉大な書物の新たなページを開くことなのだ。（旅は）すべてのものが渾沌としていて，暗闇が地の表面を覆っていた時に連れもどす。それが伝える印象は，「形と実体」へと定まりつつある混乱した物質の塊，大洪水に覆われた大地，引き退く水，そこから顔を出す山々，さらに，山より流れ下る川，といったものであり，自然の因の，規則正しい作用によって川は小さくなり，消滅してゆき，幾千年の間にその川床は干上ったものということである。そしてまた，周囲の驚異の直中にある（旅人は），聖なる書に記録された真実の証拠を求め，火や硫黄が，ソドムやゴモラの罪の都市に降り注ぎ，ヨルダン川を塞き止め，有害な湖を形づくり，旅人が進んでいる荒廃の谷に涸れた川床を残した，という多くの証拠をこの地に見い出す[75]。

流れていたヨルダン川が塞き止められて荒廃の風景をつくるに至ったとされ，それは，ソドムとゴモラを罰した神の怒りによる，と理解されている。従って，死海とその周囲とアラバの谷は，旅人によって『創世記』の神のソドムとゴモラに対する怒りの風景と見られていた。

> この呪われた地に君臨する悲嘆に沈んだ荒廃（の風景は）……全能の神の，すさまじい怒りの，際立った記念碑と言うべきであろうし，人類への永遠の警告を明示していた[76]。

> …腕をあらわにして復讐の雷を投じ，敵を焼きつくした全能の神の存在を啓示するもの（は）……充分に，見る者の心に，深い宗教的畏怖の念と，復讐の神の恐ろしい力を刻みつける[77]。

荒廃の風景の中に生成される自然がながめられると同時に，その自然が聖書に示された神の怒りを象徴するものとして表出されている。19世紀の旅人の目には，自然そのものの生成が象徴性をまとうことになっている。もちろん，こうした荒廃の自然の表出は神への信仰を確証するための手段ともなっている。この点については，もう一つの荒廃の世界，エドムにおいて旅人が明言することになる。

アラバの谷の東の壁を形づくる山岳地帯は，イサクによってエサウ＝エドムに与えられた土地[78]，イスラエル人に敵対し[79]，ナバテア人が国を作った土地である[80]。旅人の目の前に，「不毛の荒野，死の絵画」[81]があらわれる。「荒涼としていて，荒廃した」[82]エドムの地は，木々もはえず，

緑もみえず[83]，「燧石(フリント)と砂と砂利に覆われ」[84]ていた。この聖書の言うセイルの山地は，その本体が斑岩によって形づくられ,その上に「豊かな色彩と風変りな形をもつ砂岩の塊」がのっている[85]，と旅人は分析する。「グロテスク」な山と崖[86]，そして，燧石のおおう「岩石の砂漠(デザート)」[87]の大地は，しかし，決して不毛とは言えない。この土地は,「充分な雨があり，草や，たまに木々に覆われ」[88]「非常に肥沃」[89]であると旅人は指摘する。条件がととのえば，この地は豊饒の地であると理解されている。

> 平和な，勤勉な人々がいれば，最も豊かな土地であったであろう。……古代にあったような輸送の便が今あれば，エドムの力と重要性はいま一度よみがえったであろう。しかし，アラビアとインドの通商路は，砂漠から海へと移り，無視と無慈悲の暴力が，荒野を交通容易な道としていたすぐれた作業を破壊し，さらに加えて，腐敗し，懶惰な支配者が，近寄る者をなやます無政府状態と山賊行為を許していた。こうして，自然の恵は空しく浪費されていた…[90]。

この人為による砂漠・荒野こそ，多くの予言者が，イザヤがエレミヤが，エゼキエルが，アモス，オバデヤ，マラキ，ヨエルが語った，神の処罰の実現なのだと言及される。「不遜に，高慢になった」エドムが[91]，モーセにつれられたイスラエル人の通過を実力で妨害しようとしたことに，神は怒り，人も獣も滅ぼし，土地を荒れ果てさせた，と聖書にはしるされているのだが[92]，「その大いなる罪故に，疑いもなく，（神の）大いなる復讐の対象として，常に標的にされた」[93]ものと言及され，その荒廃の風景は意味づけられた[94]。イスラエル人を妨害するエドムの人々，それ故に神の怒りの対象にされた人々は，キリスト者を妨害する，繁栄をもたらす者を妨害するアラブ人と，それを許すイスラームの支配者に重ねられていることを，旅人の言表にみることができる。この地に岩の都市(ペトラ)の文化の華を咲かせたナバテア王国を建てた人々がアラブ人であり，それが滅亡して忘却の淵に沈んだこと，荒廃の風景の直中に遺されていることは良く知られたことであった。この都市が19世紀の旅行者によって，いかに「発見」され，いかにみつめられたかは後で述べることにしよう。ここでは，旅人達が，不信仰の，暴虐の人々の住処の自然の荒廃を，神の罰として預言されていたものであるとみていたこと，そして，その荒廃の風景を「神の怒りの永遠の記念物」[95]とみていたことを強調しておこう。従って，神によってエサウに与えられた土地は，はじめから荒廃の土地ではなかった，と理解される。「あなたのすみかは地の肥えた所から離れ，また上なる天の露から離れるであろう」[96]との『創世記』の神の言は，豊饒の地の荒廃化の預言として理解されることとなる[97]。神に与えられた肥沃な地は，不信仰によって，あるいは，神への信仰に敵対することによって，荒廃の地となり，今旅人であるキリスト者によって，神の真実の

象徴としてみつめられることになり，かつ，キリスト者のストレートな信仰の言をひき出すことになっていた。

ii　砂漠と砂の世界

燧石（フリント）の砂漠は，神の怒りの荒廃の地の外にもひろがる。「極度に荒涼とし，荒廃していた」シリア砂漠は，燧石と石灰岩のかけらに覆われた土地であったし[98]，それはヘルモン山の方へと広がり，「灰色の色調の広大な平地」[99]をなしていた。旅人は「荒涼とした，呪われたような山岳地帯を越えた，どこもむき出しの，赤や灰色の岩石がみられ」た[100]，と述べている。シナイ半島でも旅人は，燧石の砂漠と，硬化した土の砂漠をみる[101]。カイロの東，スエズへと広がる砂漠は，「ほとんど堅い，乾燥した地面」[102]となっていた。そこは「はてしない砂と岩石の平地」[103]であるとも記述されている。もちろん，旅人はアラビア半島に足をはこび，そこが，「乾燥した土地で，…やわらかなものといったら砂で，加えて，岩の荒野と，ひどくざらざらした砂利があり，そこでは，荒廃した土地が，長年の風に吹かれてむき出しになっている」ことを知る。砂の世界と砂岩の山地の縁が，ネフドと呼ばれた土地である[104]。こうした中東の砂漠には，木々も灌木も見られることはなく，「不毛の土地」と表出される[105]。

「荒廃と絶望的な不毛の風景」[106]，絵のような不規則な山並の土地[107]，単調な世界として[108]，広大なパノラマを旅人に与える[109]，砂漠は，「気分をやわらげることもなく」[110]，ときに，「さざ波を立てる風もなく，帆桁に役に立たずにたれさがる怠惰な帆のひだをゆらす風もない，完全に静かな海」[111]に比せられる。太陽に焦される紅海や，静まりかえる死の海の如く，砂漠は「ほとんど恐ろしくなるくらいの静寂」[112]を与える。そうした死の如き孤独さの中から，ときには自然の美しい姿が出現することになる。

> この広大なパノラマの中に，壮麗さ，あるいは美しさで目をひく唯一のものは，空に高く聳え立ち，南西の方向，遠方に，ふもとまで雪に覆われた，壮大な円錐形の尖峰をしたヘルモン山であった[113]。

くっきりと山が姿をあらわし，ターナーレスクを形づくる雲や霧のない大気の世界がここにある。砂漠にあって，旅人は，この大気を通して，強烈な光線を直接頭上にうける。

> 上空は，恐ろしいまでに，そのよごれなき美しさをもつ空と，無慈悲な，目をくらませる，ぎらぎらした光の壮麗さを通して，熱風（サムーン）（卑俗な言い方ではシムーン）が燃えるような息

をして，ライオンのように君を愛撫する[114)]。

むき出しの岩石と砂の世界は，死の恐怖の官能に旅人を誘いこむ。荒廃の中の恐ろしい官能は，当然，不毛の官能なのだから，あるいは，死に至ることもある官能なのだから——死の風景としての砂漠は後でみよう——同時代の「宿命の女」によって誘われる不毛の，危険な官能に重ねられよう。その官能的な熱のもとに，枯れゆく植物がみつめられる。

> 木々は老いると，こうした気候のもとでは生育する力を失ない，常に光をあてつづける太陽は，そうした木々を焦がし，灰にしてしまう。多くの木々が完全に焦がされて，灰の中にその形を残しているのを目にした。他の小さな植物は，地面から顔を出すや否や枯れてしまい，枯れる前に倒れてしまうハラクという植物以外は，すべてワラの色を身にまとう[115)]。

強い光に，植物は灰色に，そして，岩石は「焦されて黒くな」る[116)]，と語られる。自然はさらに，岩石の巨大な塊を崩壊させる。

> 巨大な乾いた岩石の塊（は）……ときに，腐って崩れたような，大海がその中を通りぬけてぎざぎざとなった，単離した岩石のつらなりとなっている[117)]。

この場所を，シナイの，聖書に述べられたハツェロトであるとしたのは，ブルクハルトであるが，リンゼイは，さらに，神の怒りによって，この地で預言者アロンの姉ミリアムがレプラになったということを引いて[118)]，岩石がレプラになったようだと言い，ここがハツェロトであることは疑い得ないと述べている[119)]。中東の砂漠の岩石は陽に焦されて黒くなり，腐り崩れて白くなると読みとれる。白い岩石は，後でみるように，死海の塩の化石にみられるが，砂漠の岩石も，ここでは神の怒りの風景の構成物に重ねられていると言えよう。そして，シナイの山々について，スティーヴンズは次のように述べている。

> …谷の両側の山々は，高くはないがむき出しで，ひび割れ，破片へと崩壊している。山々の頂は，かつては高くとがっていたはずであるが，時と大気の力とがその姿を変えていた。山頂は崩壊し，低落し，側面が丸味をおびた姿となり……山並全体が，全能の神の手によって揺がされたのではないかと思われた[120)]。

神の契約の舞台は，神の力を示す風景となっているということが，死海とその周辺についての言

及ほどには直接的ではないが，ほのめかされていることは，この言表からみてとれよう。

崩壊の岩の砂漠が自然の生成の姿を旅人に露呈するとすれば，砂漠の砂は自然の変貌する姿をみせる。たとえば，ヌビア砂漠では，レプシウスがこれをみつめ表出している。

> 岩石の谷…は，荒れはてていて単調であった。ただ砂岩のみで，その表面は石炭のように黒く焼かれ，石切場や窪地では，黄金のような黄色に輝いていた。こうした所から，砂の流れが，黒い鉱滓から火が流れ出すように，少しずつ流れ出し，谷をうめていた[121)]。

こうした流砂が変化する自然の美を形づくると表出される。

> これら黄金の砂の流れは，最も新鮮で，最も美しい姿を風景の中に呈している。流砂は，アルプスの高い平原から落ちてくるスイスの雪の如く，リビア砂漠の高い所より流れ落ちている[122)]。

> （砂は）なめらかで輝き，サテンのように光沢があり，ダイヤの粉末のように美しく，しなやかでうねり，光輝き，黄金に変った吹きよせられた雪のように，最もみごとな曲線やうず巻きをなして横たわる。吹く風ごとに形をかえて，常に変りつづける（砂丘の）表面は，微妙な光と影の永遠の戯れを表わしている。これらの曲線を造り出せる彫刻家はいまい。ターナー自身でも，彼の最も鋭敏な，微妙な情調（のタッチ）でもって，これら複雑な灰色と琥珀色を正しく取りあつかえるか疑問である[123)]。

巨大さ，雄大さではなく，微妙さ，複雑さで人間の芸術を凌駕する自然が描き出されている。すべては色彩と変化の妙の賛美となっている点が，スタッフォードが明らかにした，18世紀に注目された自然美との違いと言うことができるであろう。

この美しい流砂は，また，道を妨むものとして指摘される。キャラヴァンの道は，「流動する砂の建築」に突っ込む形で消えることがある。砂の早さは，こうした道の上の砂ではかれる，と旅人は述べる[124)]。所によっては，30から40フィートの高さになると言う[125)]。このように変化する砂の中で，旅人は，壁のような砂の山に行く手を妨まれ，その熱に苦しめられる。美しい風景は一転して恐怖の世界になる。アラビアの砂漠の中で，パルグレイヴがこの恐怖を表出している。

> さらさらとした赤っぽい砂の広大な海が限りなく目前に（広がり），北から南へと平行する巨大なうねへともり上り，起伏がつづく。砂漠を吹く気まぐれな風によって，あらゆる方

向にしまのできた斜面と丸い頂をもつ各うねは，普通，200から300フィートの高さがある。その中に入り込むと，旅人は，周囲を燃えるような壁に囲まれ，息苦しい砂の穴の中に投獄されたような自分を見出す。斜面を登ると，旅人は，強いモンスーンの風に流され，逆風で灼熱の波のしま文様となった，広大な火の海のようなものを目にすることになる[126)]。

砂はあまりに軽く，日々定まらぬ丘や谷を形づくり，変形する風はあまりに気まぐれで，前に通った旅人の跡が次につづく者に残されていないほどである。周囲に照り返された強烈な熱と光は，渇きと疲労をともなって旅人を混乱させ，当惑させ，ついには，旅人はコンパスを失ない，すぐに彼の墓となるひとけなき荒野の中で，でたらめに登ったり下ったりとさまように至る。多くの人々は，このようにして死んでいった。キャラヴァン全部が，何の跡も残さず，砂丘（ダフナ）の中に消えてしまったことが知られている[127)]。

微妙な光彩は，死へ導く熱砂の世界を現出し，複雑な形姿は，まよい込んだら出ることのできない牢獄・迷路となると語られている。ターナーレスクに潜在する自然の力の恐怖が語られ，恐ろしい美が表出されている。絶え間なく変化する自然は死の風景を形づくることが，ここでも指摘されている。

iii　石化の世界

エドムの荒野の記述において，旅人は放棄された自然の荒廃を語っていた。人の手を離れると自然は荒れはてた，むき出しの荒野に変ることを旅人は言明した。こうした荒廃化の姿を，カイロ東の砂漠の中に，旅人は再び発見する。

モカッタム山地（Gebel Mokuttum, Mokattam）のはずれ，カイロから5時間ほどの所に，多数の石化樹木がある。土地は，石灰岩の上に赤い砂岩の山地が，燧石や石英岩，玉髄，碧玉などの原に移った所であると記述されている。石化した木は，トゲのある木やシュロ，ナツメヤシ，それに竹に似た節のある木で，木の組織や繊維が明らかに識別できるとされている[128)]。この場所を通ったブルクハルトは，ここが古代エジプトの，アルシノエーメンフィス間の交通路の宿駅に当っていたこと，木々を生育させていた水は井戸か雨水の貯水槽からくみ出されていたものであり，エジプト王ネコスがナイル・紅海間に運河を完成させると，この交通路は放棄され，「水が規則的に与えられなくなって，木々は乾燥して倒れ，冬の雨と奔流で，砂が次第に石化作用を生じさせた」のであろう，と想定している[129)]。人の手によって維持されてきたオアシスが，砂漠の砂と岩石によって破壊され，木々は石化し，今目前に無残な姿を横たえる，と旅人は語る。荒廃の砂

漠の中に，失なわれた生命の痕跡が散らばる，死の風景がみつめられている。ここでは，石化樹木は，放棄された生命を破壊する自然の力を象徴するものとなっている。

類似の樹木は，神の怒りの風景のアクセサリーでもある。死海の岸辺には，ヨルダン川を流れ下った流木が打ちあげられている。「石化した外見を示して」いて，燃やされたかと思えるような黒い色をしているが，「塩で外側を覆われた木」の存在も指摘されている[130)]。「毎年疑いなく雨季には，不吉な姿の木々が増加する」[131)]と指摘しつつも，旅人は，これら石化した流木が古代の木であると述べている。

> すべての生命をあざわらうかの如く，古代の洪水によってヨルダン川を下ってきた木々が……気味の悪い骨の腕を伸ばしていた[132)]。

> 置かれた状態からみて，これらの木々は，多分，幾世紀もの間同じ場所に置かれていたものである[133)]。

> この木は，幾世紀も前にパレスティナで消え，ここに，その体が香詰めにされて残されており，古き時代にイェリコにシュロの都市という称号を与えた（『申命記』34章，3），シュロの林の唯一の記念物である[134)]。

神の怒りの死の海の流木は，神の怒りの洪水やモーセの約束の土地を想い起すべき記念物とみられている。「香詰めにされた」ミイラのような，石化した木の死体が，「死そのもの」の世界に置かれている，という表現の組み合せがこの死の風景にみられるのだから，アブラハムの神に敵対するとともに，モーセの神に敵対する人々とその世界の，不信心の世界の荒廃が，石化樹木によって象徴されるという見方を提示する。こうした組み合せが，イエス・キリスト賛美の木の枝や，磔刑の木にまで及ぶのか否かは，これらの旅人の記述からは明らかではない。

この敵対の死の土地で，旅行者は，ヨセフスが述べているソドムのリンゴ——彼自身この名を使用していない——を見つけ出す。ヨセフスは，外見は食べられる果実だが手にとると煙と灰になってしまう植物があり，その灰が雷によって崩壊したソドムの痕跡であるとしている[135)]。

ソドムのリンゴをつける木は，灰色がかった，コルクに似た樹皮をし，長い楕円形の葉をつける。一般的な特徴からは，多年生のトウワタ属の植物（*Asclepias gigantea vel procea*）とみられる。折ると多量のミルク状の液を出す。果実は，リンゴ，オレンジ，または，ザクロに似る。熟す前は，薄い外皮状の緑色の果肉があり，指でさわると簡単に穴があき，ミルク色の液を出す。熟すと，赤味がかった黄色になり，おしたりたたいたりすると，空気袋やホコリダケのようにポンと

はじけて，手の中にはほんの少しの薄皮と繊維が埃のように残る。果実の中は空気で満たされ，真中に小さなさやが茎からのびていて，繊維によって外皮とつながる。さやには，種子をつけた，少しの美しい白い絹のような毛が入っている。アラブ人は，この毛で火縄を作っている[136]。旅行者達は，このように詳しく，このソドムのリンゴを記述している。ヨセフスの意味づけが，あまりに明解であるためか，科学的な目の方が，宗教的，象徴的な目に勝っているようである。しかし，みせかけだけの果実，その欺きの姿が，蜃気楼のときと同様に明るみに出されている。不信心の，敵対する者の居る死の空間にある偽りの果実，飲むことのできぬ海のわきに生える食べられぬ果実，それが神の怒りの痕跡を帯びる，というヨセフスの言に加えるべき言葉はないのかもしれない。ロビンソンは，「最も明解な説明は…ヨセフスにある」としているのだから[137]。

18世紀の博物誌家は，化石の中に神の怒りの痕跡をみとめていた。石の中に閉じ込められた，南の海の生物の痕跡から，アルプスの化石が，神によってもたらされた大洪水を物語るものとされていた。石化生物は，自然の歴史の始まりの時代へ我々をつれてゆくものと考えられていた[138]。中東を旅する，19世紀の旅人も，サンゴやカキやウニの化石を，レバノンの山中やナイルの岩石や死海や紅海岸で見つけ出す[139]。この辺の岩石の基層が石灰岩の層であることから，当然のことであろう。こうした石化生物について，旅人はほとんどコメントらしいコメントを加えていない。バートンがユーモアまじりに，ミディアンの崖の所にある多数の巨大なカキの化石が，「先史時代の巨人達の宴会を示していた」[140]と述べている。石化生物に，地球の歴史の断片を認めているにせよ，象徴性の確認には至らぬようだ。こうした化石の中で著名なものに，カルメル山の修道院近くに見つけられる，ウニの化石がある。石化メロン（*melonibus petrefactis*）とかユダヤの石（*lapis Judaica*）と呼ばれるもので，住民は石化果実と呼び，メロンやオリーヴに似たものであると報告されている[141]。カルメル山は，そこで預言者エリヤが信仰の証を示した所だが[142]，修道士達は，そのエリヤに，ここの住人の一人が所有していた果樹園の果実を石だと言って求めに応じなかったため，果実が石になったという伝承を旅人に語っている。預言者に拒まれた果実の方は，今日の巡礼が自由に手にすることができる，とウォーバートンは述べている[143]。カルメル山に信仰の証が見出せる，ということなのだろうか。不誠実さは石化をもって報われ，信仰はその渇きをいやされる，という言表の構図をみてとることができる。こうした構図で意味づけられた化石は，死海の「塩の化石」（fossil salt）にみることができる。旅人は，死海の南岸に，ウスドゥム（Usdum, Esdoum, Sdoum）という塩の山をみる。この山はでこぼこした岩塩の山で，白堊状の石灰岩，または，泥灰土に覆われ，ところどころ崩落した切り立った崖の部分に，結晶化した塩の化石がみられる。周囲には，多くの場所に，巨大なピラミッド状の塩の柱があり，ときに，ロトの妻とされている[144]。聖書によれば，ソドムとゴモラを滅亡させた神の怒りは，ふり返ることを禁じられ，救われることを保証されたロトの家族の内，禁を破ったロトの妻を塩の柱に変えたという[145]。大

地の激動による「塩の山」の崩落，そこに孤立する形で残る塩の柱。ロトの妻の伝承は，こうした姿を示すものと理解されている。これも神の怒りの記念物とみられよう。塩の海の岸辺の，塩の化石が作る塩の柱は，従って，洪水と激動の神の怒りと自然の歴史を目の前の旅人に示すものということになろう。石化した世界は，こうして，旅人にとって，自然の荒廃の原因を，その理をあらわにするものと考えられよう。自然は変化するものであり，その変化は，荒廃の風景のアクセサリーである石化した物質を通して理解され，それが神の怒りに結びつけられるというのが，石化世界を目の前にした19世紀の旅人の基本的な考え方であった。この荒廃の世界で生命を失なえば，その運命は石化した物質に明らかだと言い得よう。荒廃の風景の中の，旅するもの達の死の姿については，後にふれることになろう。

iv　火山地帯

聖書は，ソドムとゴモラを襲った激変(カタストロフ)の災害を，次のように述べている。

> 主は硫黄と火とを主の所すなわち天からソドムとゴモラの上に降らせて，これらの町と，すべての低地と，その町々のすべての住民と，その地にはえている物を，ことごとく滅ぼされた。……アブラハムは，…ソドムとゴモラの方，および低地の全面をながめると，その地の煙が，かまどの煙のように立ちのぼっていた[146]。

この記述を，ロビンソンは「火山活動と地震」の合体であるとし，「雷をひきおこす，放電（現象）をともなう」ものと解釈している[147]。そこで，この神の怒りの風景である荒廃をひきおこしたとされている，火山活動と地震がいかに旅行者によって表現されているかを，そして，それがこの旅人である地理学者によってカタストロフと呼ばれていることについて，みてみることにしよう。

18世紀から19世紀後半にかけて，岩石の形成と地殻変動に関する地質学上の論争が展開された。ヨーロッパの地質学者は，主に，水成説(ネプチュニズム)およびカタストロフィズムと，火成説(ヴォルカニズム)および斉一説(ユニフォーミタリアニズム)の二派に分かれ論争した。この二派は，また，その提唱者の名をとって，ヴェルナー派とハットン派と名づけられている。

ヴェルナー派の考え方によれば，地殻を造る物質は原初の海に溶けていたもので，それからまず，結晶性の岩石が析出し最下層を形成し，花崗岩の層となる。その上に，石灰岩，頁岩の層が堆積し，さらに，火山性の岩石が積み重なり，その上に沖積堆積物の層が形成される。このヴェルナー派の説が水成説とされるのは，とくに，玄武岩が，こうした水溶物質の析出による地殻構

成物と解釈されていることにより，ハットニアンの，玄武岩，花崗岩は火山性の岩石であるとする，火成説に対比されるからである[148)]。

18世紀半ば，フランスのオーヴェルニュで，ゲタールとデマレが，溶岩流中に柱状の玄武岩を発見し，玄武岩は火成岩であることを明らかにした。そして，ピクチュアレスクで恐ろしい火山風景を流行させた，駐ナポリ公使ウィリアム・ハミルトンが，ヴェスヴィオス火山の溶岩流の中に玄武岩と黒曜石を発見し，玄武岩火成説は充分に確認された。さらに，1816年に，ピエール・ルイ・コルディエが実験によって玄武岩の構成を明らかにし，20年代に，水成説をとっていたレオポルド・フォン・ブーフ（1774－1853）が，玄武岩を火成岩であると認めるに至って，この問題は論争点ではなくなった[149)]。

火成岩か水成岩か，ということが論争点でなくなったあと，二派の論争は，地殻の変動が，現代人にはほとんど経験されなくなったような激動，激変によるか——カタストロフ説——，あるいは，長い時間をかけた，現代でも経験される，ゆるやかな変動によるか——斉一説——，という論点に移る。ヴェルナーリアンは，もともと，原初の海という形で洪水というカタストロフを認めていたが，19世紀に入って，山脈の地層と隆起・形成を説明するにあたって，火山活動によるカタストロフとそれによるクレーター隆起を認めるに至った。水成説をとっていたデマレやフォン・ブーフが火山を調べだしたのには，こうした背景があったと考えられる。フォン・ブーフは，地下にたまった溶岩の圧力が山地を隆起させ，結晶性の深成岩もこうした地下の溶岩によって形成されたものと考えた[150)]。聖書地理学者であった旅行者ロビンソンは，このフォン・ブーフと，「ソドムのカタストロフ」について意見を交している[151)]。キュヴィエの古生物学上のカタストロフ説とブーフの説をとりいれ，エリー・ド・ボーモン（1798－1874）[152)]は，カタストロフィックな褶曲山地の隆起という説を提唱し，その地球規模のカタストロフは，聖書の洪水言及に関わりを持ちうるかと考えた。これに対してカタストロフを拒否するハットニアンは，ライエルが『地質学原理』をまとめて，斉一説を明らかにして，火山や地震による山の隆起を説明しても，地層の変形や山脈形成は充分に説明できず，カタストロフ説の方がうけ入れやすかった，と考えられている[153)]——ここでは進化論のコンテクストは別とする。

こうして，19世紀の中東旅行者が親しんでいた地質学は，地層についてのヴェルナー派のとりくみ，火成説による玄武岩層形成の解釈，それに，洪水・火山・地震というカタストロフ——必ずしも全地球的にということを意味せず，ローカルな問題として理解され得るものであったと考えられる——の了解であったとみることができよう。

中東旅行者は，ヨルダン・紅海地溝帯の周辺，とくに，その東側で，火山地帯，溶岩台地に出会う。北は，ダマスカスの南部の溶岩地レジャ、ティベリアス湖周辺，中部はエドムの東，南は，ヒジャーズの北部とメッカ・メディナの周辺に，クレーターと溶岩流の造る荒野が広がっている。

旅行者の見た火山は，「鉢の形をした窪み」をもち，一方の側面がくずれ破れた，「アームチェアー」の形をしている。クレーターは火山性の噴出物——破砕された溶岩や玄武岩，軽石，火山灰など——に覆われた，コップ状，あるいは，楕円形の窪地であり，円錐形の丘となっている。内側の壁は「鉱滓状の溶岩の急な壁」で，側面は「噴出した溶岩と噴火の爆風」で「破砕され」破水口，あるいは，裂け目を作っていて，岩床（リーフ）が走り，溶岩が堆積している[154)]。

溶岩流は，砂岩層，あるいは，石灰岩層——砂岩層に乗った石灰岩層を含めて——の上に流れ出ている，と指摘されている[155)]。破砕された溶岩の下に，焼かれた白堊の岩，石灰華がみられるとされ[156)]，「砂岩の谷の崖の上に，中空の波のように硬化した，うねった溶岩の大波が立つ」[157)]のがながめられている。その砂岩層上の溶岩流は次のような意味をもつものと考えられている。

> 火山性の外皮（＝溶岩）を越えた（山地の）周囲は，低い平地にむかって砂岩の副崖と柱の，荒廃の縁となっている。このことから，古い砂岩の土地が，最もゆるやかな風化によって摩滅し，（その高さが）減少していたのに対し，溶岩流は，柔らかな基礎の砂岩を保存し，このウエイリド（Aueyrid と表記，今は，'Uwayriḍ）の山塊は，今や巨大な山のように，600尋の高さにまでなっている…。溶岩流の大変な厚さからみて，我々は，この火山地帯の初まりは，とても古いものであると考えることができる——荒廃したウエイリドの涸れ谷が断截された壁に見える玄武岩の流れの上に，これらの（溶岩の）流れ（が乗る）[158)]。

もちろん，玄武岩は火成岩で溶岩流の中に認められるもの，とされているのは明らかである。「大地の無数の穴から液体状であふれ出し」[159)]た，「その結晶性の特性から長斜方形をしている」[160)]玄武岩は，「船底の木材に似た円柱状」[161)]をしていることが認められている。そして，火山性岩石が多孔質であること，カンラン石の結晶がみられることが指摘されている[162)]。

こうした，地質学的な描写に加えて，溶岩台地の荒廃の風景が表出される。「放棄され，倒壊し，被災した，形を失った破片」の覆う世界は，「キュクロプスの都市」「巨人の荒野」で，「未開の荒廃の絵」を呈している[163)]。溶岩は，その岩山と砂原とが，「大きな波と谷」を成し，「馬のたてがみに似た，いく重にも重なる鉱山滓のような波」は，「立ったまま石化し」，あたりを覆う溶岩の原は，「先のするどいガラス質」で，踏み込む人々の足をきずつける障碍となっている[164)]。収縮，地震，風化によって，破砕され，切り裂かれた溶岩の原は，この地で育ったラクダやアラブ人以外は通りぬけることのできぬ，「迷路」「迷宮」なのだと語られる[165)]。

> 火山性物質のなんという荒涼たる黒さ，生命なき障碍か。——永遠に晴やかさを失った自然の固まった姿，焼けてはっきりとした形のない物質の，錆色の，恐怖の荒野。ここに侵

入し，心に圧迫を感ずることのないような，いかなる孤独の命があろうか。不毛の天，悪夢の地。どこに慰めを見つけ出せよう。——自然の原初の世界の神の姿の現出にあって，粗末な，俗なる生を送る人間の良心は，ぎくりとさせられることか。……このような恐ろしい土地を，夢にも見ようとは思わなかった。それは，（ちょうど）ヴェスヴィオスから南東方向を眺めて（見られるような土地で），ヨーロッパ人は，その土地で，足を苦しめ，重い心をひきづっての冒険を敢えてしようとはしない，そうした，目をうんざりさせる土地であるが，（この）アラビアでは，貧しい遊牧の民に，ミルクとバターをもたらす土地なのだ[166]。

ヨーロッパの旅人にとっては「禁じられた」[167]砂の砂漠の如き死の世界，不毛の荒野は，キリストの神の信仰を離れた遊牧の民，エサウの末裔には，生くべき世界である，と対比されている。ヨーロッパ人を閉じこめ，すくませる力は，この火山の姿でも，疫病の如く，アラブの民，イスラームの信仰者に運命の生を与えていることを旅人は読みとっている。そして，その力が，自然のカタストロフとして，神の怒りの姿をあらわすことを，旅人はみつめることになる。

神の処罰の手段は，聖書によれば，硫黄と火であった。旅行者は，死海の海岸で「硝石と上質の硫黄の，ナツメグから卵くらいの塊を集め」，また，そこが「やわらかいチョーク，あるいは，泥灰土の土地で，非常に純粋な形の，多量の硫黄を含んでいる」ことを発見する[168]。こうした天然の硫黄は，アラブ人によってラクダ治療に使われている，と指摘されている[169]。神の怒りの痕跡である硫黄は，集められ，手にすることのできるものであるが，火の方は解釈の余地のあるものである。旅行者達は，この火の痕跡を，死海に浮かびあがる瀝青（ピチュメン）（チャン，アスファルト）にみることとなる。このチャン浮上の現象は，ヨセフスもディオドロス・シクルスもともども述べている[170]。ヨセフスによれば，死海がチャンでいっぱいになると，ボートにくっついて離れなくなり，航行しにくくなり，女性の経血と尿以外ではとれなくなるという。チャンは，船板のつめ物として，また，病気の治療薬として使われると言う[171]。旅人は，こうした古代の記録に留意しつつ，地震のあとに死海の水面に浮かぶチャンに言及する[172]。これらのチャンから，十字架やコップなどの記念品（スーヴニール）が作られ，聖地巡礼者の手に渡ることになる[173]。しかし，死海のチャンが単に聖地の思い出となる，ということだけが旅人にとって確認されているわけではない。このチャンには，神の怒りの痕跡がみられる，ということを旅人は強調する。

死海自体は，巨大な大釜で，永劫の罰を受けた平地の諸都市は，その中の塩の水にゆでられつづけ，そこから，チャンの塊が，わき立つ水面に泡立って上ってくる[174]。

こうした神の怒りの痕跡の説明に対し，もっと積極的に，神の怒りの火に死海のチャンを関連づけた説明もみることができる。

> …この［ソドムとゴモラの］カタストロフが起る前に，チャンはその源に集っていて，この平地に広くひろがり，層を成していたと思われる。多分，これら［チャン］の層は，地面の下に広がって，都市付近にまで，たやすく近づき得たのであろう。もしこのように考えられるならば，そのような可燃性の物質の塊が，火山活動か，天からの雷によって火がつけられ，都市をとりまいたのみならず，平地の表面をも破壊するに充分な大火災を起すことになり，「この土地の煙は，かまどの煙の如く，登っていった」のであり，襲って来た海は，この地を水の原に変えた，ということになろう。このような多量のチャンの堆積は，初めは途方もないことのように思われるかもしれないが，この仮説は，トリニダッド島にみられるような，驚くべきチャンの湖，あるいは，原という，自然みずから我々の目に見せてくれるもの以上の（そして，それ以下の）ものを必要としない[175]。

こうして，神の怒りの風景の中に，火山活動に関連づけられる物質が認められ，それが，自然の激動＝神の罰の証拠として，あるいは，その痕跡として考えられることが，旅人によって確言されたことになる。旅人をはばみ，迷わせる火山地帯の荒廃は，神の怒りの風景に結びつけられ理解されている。

神の怒りの痕跡であるチャンが死海の上に浮びあがることは，1837年１月１日の大地震でも確認されている[176]。死海のカタストロフを思い起こさせるこの大地震の，直接の経験を表わした旅行記を読むことができないでいるのだが，地震直後救援にかけつけた，ベイルートのアメリカ人宣教師トムソンから，詳しい情報がとどけられているようで，リンゼイ，ロビンソン，ソルシィが，ティベリアス湖周辺の町々の惨状を報告している[177]。それによると，ティベリアスとサフェド（Safed, Szaffad, Safet などと表記，今は Zefat, Safad）の町は，囲壁が倒壊し，家々は瓦礫と化し，ミナレットのいくつかは倒壊し，荒廃の町，恐怖と困窮の光景を呈していたという。とくにひどいのは丘の斜面のユダヤ人地区で，家々は斜面を落下し，多くの人々が生き埋めになったと伝えられている。サフェドの死者は数千人を数えたという。1755年にリスボンを襲った大地震が，文明化された世界の脆弱さをみせつけたように[178]，祈禱中のキリスト教徒130人を埋め殺した教会，巡礼者用の宿舎を失ったナザレの修道院がみつめられた。キリストを信仰する世界や場所も，一瞬にして崩壊したことがみつめられている。もっとも，こうした惨状について，「不運なる都市よ!」[179]という他に，コメントらしいコメントは与えられてはいない。しかし，荒廃の風景を形づくるミーティアの破壊力は，静かにみつめられていると言うべきであろう。今は人工物を破

壊し，地面に亀裂を走らせ，チャンを水底から浮きあがらせる自然の力は，遠い昔，神の怒りとしてのカタストロフを生成したものであったことは，深く旅人の心に刻まれる。そうした旅人の言葉は，すでに，種々の荒廃の風景の表出においてみてきたものである。

v　死の危険

神の怒りに由来し，また，神の怒りに重ねられた，荒廃の風景は，これまでみてきたように，死そのもの，死の静寂，死への誘いの世界として，旅人によって描かれてきた。荒廃の砂漠は死の痕跡にあふれ，そこに侵入する者は死の迷路にまよい込むと表現されていた。そうした，荒涼たる砂漠の死の彷徨は，古くはローマの時代にさかのぼる，と指摘されている。

アウグストゥスの命により，アエリウス・ガッルスの指揮下，1万1千の軍隊が，幸福なるアラビア（アラビア・フェリックス）の富を求めてアラビア半島に侵入したが，ペトラのナバテア人によって途を誤まらせられ，砂漠地での野蛮人の大集団との戦闘で2人の兵士を失う。目的を果せず，帰途，60日もの間荒野を彷徨し，多くの兵士は死んで行った。ローマの人々は，すべてをガイドの裏切りのせいとし，ラクダで充分な水を運ぶべきであったとしている，と旅人はこの死の彷徨を紹介している[180)]。水の欠如した砂漠での彷徨，信頼のおけぬガイド，それらは，19世紀の旅人の砂漠の行進の姿に重ねられる。砂漠の死の行進は，キャラヴァンの道にその跡をとどめていると旅人は描写する。

道のわきに，ラクダやロバの白骨化した死体が散乱する。半分食べられたラクダの死体にはハゲワシが群がっている。流れる砂がキャラヴァンの道を消しても，多数点在する白骨が，道を表示する。レプシウスは，そうしたラクダの白骨死体を，30分ほどの間に41体も数えている[181)]。

渇きと疲労から，通ることの困難な岩石地帯や水場近くで，多くのラクダが死をむかえる。水場では，すでに弱りきったラクダが水を飲みすぎ，疲労に抵抗し得なくなって，その荷の重さにおしつぶされる[182)]。ベドウィンは，連れているラクダの死には全く無関心の態度をとるとされ，それは旅人の気分を悪くする。

> それは獣であった。しかし，獣でも，砂漠で孤独の死に至ることは，涙を流すに値するものだ。ラクダは我々が知っていたし，一緒に旅をし，我々の小さな世界の一部を成していたのだった[183)]。

死体は普通そのまま放置され，ハゲワシにその処理がゆだねられるのだが，ときに巡礼者の胃袋を満たすことがある。信仰に従って至当にノドを切られた動物は，アフリカから来た，「半ば餓

死しつつあるような，極めて貧しい」黒人巡礼（テクルーリ）の一行にもちさられ，食事時間に料理されるという。彼らほど「貧窮した人間を，私は知らない」とバートンは，この出来事を目撃して語っている[184)]。無感動のアラブ人，困窮しても巡礼をつづけ，ハゲワシの同類となった黒人，そして，それらの人々にかこまれ，旅をともにした動物に心をよせてその死を悼むヨーロッパ人，という対比の構図が死の風景の中に浮かびあがる。

白骨化した動物達に加えて，キャラヴァンの道には，巡礼達の死を示す場が示される。

> ある朝，キャンプ地のそばをぶらつくと，むき出しになった墓と，その中で歯をむき出しにして，にやりとして私の顔を見つめている骸骨があった。――疑いなく，不運な巡礼の遺物（であった）。メランコリーな記念物！[185)]

ルネサンス以来の伝統的な表現である，孤独の死・骸骨・メランコリーが，巡礼の死の場をもつつみこむ。この表現とは，私たちはすでに，ヘスター・スターナップの死の場で出会っていた。女王も乞食も，中東の空の下，ハムレットの道化の如く，むなしい死をむかえるというところか。旅という移行の中の死，定めなき漂泊の中の死が，その現実の生のむなしさを指し示す，ということを意味するのであろう[186)]。同行の者の居る巡礼の死は，それでも，「殉教者」とされ，墓が立てられるだけ良い。全く寄方ない貧窮者の場合は，道でたおれると，放棄されてしまうことになる。こうした巡礼の死体は，動物達と同様，腐肉を喰う動物の餌食となる[187)]。

> …彼らは，その長い道のりでの生活の糧を，いやがる人々の施物に頼っているので，メッカへの過激な旅を成し遂げるのはむつかしい。……年毎の，むなしい考え方による肉体の苦痛と犠牲，そして，失なわれた努力のすべてのいかに大きなことか。ほんのちょっとした科学的な考え（ソールト）が，彼らの信仰のすべてを消滅させるであろうに[188)]。

つまり，旅人の目には，メランコリーな死の風景は，少くともイスラームの巡礼の場合，偽りの信仰の，知的でない迷信のむなしさを表出するということなのだ。荒廃の世界は，旅行者達を，こうした死の風景の記念物にひきよせ，一体化せんと死の危険に陥し入れる。そうした危険の一つが，砂漠における水の欠乏であることは，明らかなことであろう。

水の欠乏は，不注意によっても，また，予期した水場に水がない場合でも，旅人を苦しめる。カイロからスエズにむかう道で，スティーヴンズ一行は，用意した水袋が良くなく，中の水が飲めなくなり，二日も水の欠乏に悩まされる。同行のアラブ人が水を見つけ出す3時間の間の「渇き」の状態を，彼は次のように描く。

…私には水のことしか頭になかった。私の想いの中では川が流れ，頭に太陽の熱線をあびつつ，ゆっくりとラクダにゆられながら…，霜のコーカサスを思っていた[189]。

さほど困難ではない，多くの人々が行き来するルートで，不注意な準備をしてしまったスティーヴンズの言葉には，さし迫った死の影は感じられない。これに対し，ブルクハルトが加わったヌビア砂漠のキャラヴァンでは，予定の水場で水がなく，それが分った時には一日分の水も残っていない，という状況であった。それから二日ほど，全くの荒野を進み，一日に二度ほど口をしめらすという次第で，ロバも倒れはじめ，水を与えぬとすべてのロバが死ぬ，という所まで追いつめられる。数時間の所にはナイルが流れているはずではあるが，そこに居住するアラブ人は隊商に敵対しており，水を汲みにそこを通ることは襲われる危険性が高く，襲われなかったとしてもラクダの足あとが追跡されてキャラヴァン全体が襲われることになる可能性もあって，水をナイルに汲みに行くことは最後の取るべき途であった。長いこと話しあわれ，この途がとられ，水を待つキャラヴァンは緊張の時間を過す。翌朝夜明け前に水は到着し救われる。ブルクハルトは，こうした方途を取った場合の危険性を，伝聞をまじえて語っている[190]。ここでは，キャラヴァン自体の破滅が，さし迫ったこととして受けとめられている。

レプシウスは，ナイルから紅海への旅で，ガイドもろとも道に迷ってしまい，さらに，道をさがすガイドともはぐれ，水場から見離なされ，「危機的な状態」となる。目的地へは二日半，ナイルへは五日の距離で水を失い，道を失なって，飢えと渇きに苦しめられる。荷を送ぶ他のグループがなんとかレプシウス一行を見つけ出し事なきを得た[191]。信頼のおけぬガイドと，それ故の彷徨は，古代ローマの例の如く，旅人を破滅の道へ誘ってゆく。道で見つめつづけた，ラクダの白骨や巡礼の墓が，ヨーロッパからの旅行者の運命となる，その一歩手前の状況が語られている。荒廃の世界の提示する死の風景は，その危険でもって，旅人の身近に迫っていたことが指摘されている。荒野の危険は，もちろん，疫病の危険に重なっている。むき出しの自然それ自体は，水の欠乏という形で，その危険な素肌を旅人に感じさせるという言表が，こうした旅人の記述から読みとれよう。

4．天候急変

i　熱風と砂嵐

砂漠（デ）・荒野（ザト）は，旅人を，その迷宮に誘い込み，生命を断つべく水の欠乏で苦しめ，破滅へと導くものとして表出されて来た。そうした世界にあって，旅人は，死に誘う熱風の愛撫を受けると

述べていた。強い熱風，砂嵐は，中東ではシムーンおよびカムシーンと呼ばれている。19世紀の旅行者は，この2語に加えて，シロッコ（シェルーク），ハリケーンという語をも使っている。

カムシーンは，アラビア語の50を表わす言葉で，4月にはじまり，50日間吹きつづける熱風であると多くの旅人は言及する[192]。ブルクハルトは，「露の季節」に吹くものとし，ナイルがエジプトで増水を始める季節に当ると述べている[193]。これに対し，バートンは，エジプトのコプトの天文学者が，一年を四つのカムシーン（50日）と，四つのアルバイーン（40日）に分け，最初のカムシーンが春分の後の満月の次の日曜——ということはイースターということになるのだが，このことについては言及せず——にはじまるので，この時期——つまり，3月末から5月半ばまでの，最高29日の変異が生ずるが——に吹く風の故にカムシーンを呼ばれると説明している[194]。こうして，50ということと季節との結びつきが明らかにされる。

シムーンは，砂のアラビアに吹く，「有毒な風」と訳されてきた熱風・砂嵐で，アラビア語の毒に由来するとされ，あるいは，アラブ人が「毒に満ちた」風と言っていると述べられている[195]。この毒風は，致死的な熱風であると伝えられて来たものであるが，それは全くの誇張である，と実体験の旅人は語っている。ときに，キャラヴァンが，この砂嵐によって窒息させられ，全滅したと伝えられているのだが，こうした話はベドウィンによって笑いとばされたと述べられる[196]。旅人を破滅に導くという伝説の異世界が，そのヴェールをはがされ，旅人の前に現実的な熱風・砂嵐が現われる。

熱風が吹くと，大気はよどんだような暗さを示す。細かな砂の粒子で大気は満たされ，黄色がかった灰色の，厚い雲や霧のようなヴェールが太陽をかくし，暗褐色の陰気な円盤がそのヴェールを通して見える，といった状態となる。その暗さは，「地獄が大地から昇って来たか，天から降りて来たかのようであった」と語られる[197]。灼熱の風は燃焼した空気を旅人の顔に吹きつけ，旅人は息苦しさを覚える。また，焼けた砂や小石が熱風によって吹きとばされ，旅人は肌を針で刺されたように感ずる[198]。道は砂によって「完全に消滅し」，5，6フィート先も識別できなくなり，道に迷う。すべては混乱し，「カオスの如く」になると述べられる[199]。旅の目や耳や口は，砂でみたされ，ポケットの中のものも，テントの中の鍵のかけられたトランクの中のものも，砂だらけとなる。食事の時に襲われた旅人は，ピラウや料理が「砂の強烈なスパイス」でだいなしになったことに，がっかりすることとなる[200]。疲労が，砂嵐によって倍加する，ということが意味されるのであろうか。数多い食事記述には，息ぬきとなっている食事，その土地での歓待が表出されているとみられるが，こうした息ぬきや歓待が砂嵐によって拒絶されることになる，ということが意味されているのであろう。

砂嵐は，また，ヨーロッパからの旅行者に，「奇妙な大気の現象」[201]を見る良い機会を与えてくれる。

しばしば，多量の砂と小石は，じょじょに非常な高さにまで巻きあげられ，直径60から70フィートの円柱を形成する。一つ所にとどまっていると，非常な厚み故に，固体の塊のようにみえる。これは，自らの縁の内部で回転するだけでなく，広い範囲の地面の上を，円を描くように動く。ときには，1時間もその形をくずさず動き続け，消滅するとそこに小さな砂の丘を残す[202]。

大気は…砂の柱によって満たされた。それらは，平らな地面の上を，旋風の翼にのって迅速に走りまわった——聳えるような顔をもった巨大な黄色の柱が，雲の形をして，水平に後ろに曲っていた。……こうした砂の円柱は,とらえがたい荒野の霊鬼(ジン)と考えられている[203]。

気まぐれな竜巻(トルネード)の動きが，アラビアン・ナイトの霊鬼(ジン)達に重ねられ得る，と旅人は認めている。巻きあげられた砂の円柱も不思議だが，その現象は，その作用や動きにおいて，「人がさらされる天の配剤(ヴィジティション)の中で最も奇妙なもの」だとされている。1ヤードの距離で破壊されるものと全く作用を受けぬものを分けるほど，その作用は局部的なものだと述べられる[204]。そして，竜巻は，突然現われ，突然消える。エドワーズは，エドフ（Edfu と表記，今は Idfu）で竜巻にあって，次のように描いている。

その時，美しい妖怪のように，近くの砂漠から，うねった半透明の黄色い砂の柱が現われ，刻々（上空へ）と高くなり，平地を横切って北へと移動しはじめた。その時，もう一つ（の砂の柱）がずっと南の方に現われ，三つめが対岸の川岸にそって神秘的にすべるようにやって来た。我々が三つめのものを見ている間に，最初のものが，砂の柱を追いかけるようにしてゆれながら空気の中にとけてゆく，すばらしい羽毛のようなものを投げ出した。そして，今や，南からのものが，砂漠の上500フィートはあろうかという高さで，平坦な広大な空間をわたって来て，突然二つに分れた。下半分はすぐと崩壊し，上半分は，しばらく中空につりさげられていたが，雲のようにゆっくりと広がりただよった。その間，他の小さな円柱があちこちに形づくられ——ゆっくり少々動き——波うち——散り——また集まり——そして，塵と消えてゆく。そして微風は止み，この尋常ならざる見世物は，突然終りをつげた。2分もたたぬうちに，一つの砂の円柱も残っていなかった。現われたように消え去った——突然だった[205]。

奇妙な，美しい霊鬼(ジン)・妖怪の訪問をうけて，旅人は，同行のアラブ人達とともに，防御をかたくする。頭や体を外套や頭巾で覆い，身をかがめ，ラクダの体の脇にうずくまるようにする。と

きには倒れてしまい，そのままの姿勢で嵐をやりすごすが，ときには近くにテントを見つけ，なんとかその中に入り込んで，平たく伏すこととなる[206)]。しかし，頼みのテントは，突風の一撃で倒される。砂嵐の中でテントを張るのもむつかしく，旅人は風と格闘をくり返すこととなる。烈しい風はキャラヴァン全体を押し倒すこともある。ときには，中に居た旅人の頭の上にテントが倒れ，旅人は種々の破片の中に埋められることにもなる[207)]。所持品はそこらに散乱し，新聞やパンフレットの類は風に舞って失なわれる。バートンは，地理学者ユリー・ド・ボーモンの１冊も吹きとばされたと述べている[208)]。

砂に苦しめられ，風と格闘し，暑さにあえぐ嵐の中の旅人は，生命に危険を感ずることはないが，軽い酸欠を覚える。息苦しくなり,気を失ったようになり，心臓が弱くなったと述べている[209)]。そして，そうした不快感とともに，「無気力と極度の疲労」「全体的な無力さ」「体力と精神力の喪失」を覚えることになる[210)]。それは必ずしも暑さのせいばかりとは思えない。そこで旅行者は次のように考えることになる。

> …砂漠の熱風は，神経組織を弱め衰えさせる影響力を持った，大気の電気的状態に関連するものと信じられる[211)]。

この電気的状態ということに関して，バートンは，砂の粒子に満ちた熱風である，「乾いた嵐」を「研究すべき電気的現象に由る」とし，竜巻の砂の柱は，「電気的な風の渦」が巻きあげたものと述べていて[212)]，電気的現象として砂嵐をみる，という考えを明らかにしている。砂嵐によって，肉体のみならず精神も影響を受けるという考え方は，ペストが精神に影響を及ぼすという考え方に重ねあわされ注目される。「わずかな精神的，あるいは，肉体的活動ができず」に居た[213)]，と表わされる怠惰さを与える中東の自然は，中東に滞留するペストとともに，旅人を囲繞すると読みとれる。もっとも，中東の砂嵐に，直接的に怠惰＝不信仰を生む力を結びあわせるといった旅人の言及はみられないので，神の力を背景にみとめる，ということは明らにされることはないのだが。すでに述べたように，旅人は砂嵐に特別な生命の危険を感じていないが，すでに弱っている人間や動物にとっては致死的な影響力を持つものと言明している[214)]。衰弱した生命にとって，砂の熱風は死の愛撫になる，ということであろう。肉体と精神に打撃を与える電気的な「美しい妖怪」が，その愛撫によって，旅人を死に誘う。中東の荒廃の風景の中の気象（ミーティア）が，こうして細部にわたって旅人によって描かれる。この荒廃の風景の中の気象は，次の嵐の中で，信仰の意味づけに関わりを持つことになる。

ii　嵐と洪水

冬の嵐は旅人の足をしばしとどめる。エドムの地での6インチの降雪は，山の道をとざす[215]。この地をとざすものに，荒廃した自然があったことはすでに述べた。冬の嵐は吹雪をともなって，荒廃の風景に加えられることとなる。神の怒りの風景は，白いアクセサリーにかざられる，ということであろうか。

ヨルダンの谷が暑い夏の時季，白い「雪の花冠」[216]をつけているレバノン山は，その名が白を意味するレバンという語に由来しているとされている[217]。その万年雪（ネーヴェ）はしばしば雪崩をおこし，端に多くの堆石（モレーン）があって歩きにくくなっている[218]。降雪があれば，その深さで道が失なわれ，馬などをすすめるのは困難となる。このレバノン山には，神によって植えられ，エデンのすべての木々がうらやんだ杉（シーダー）があり[219]，旅人はそれを目ざす。白い花冠は栄光の杉への道をとざすものであることが強調されているように思われる。

神の怒りの風景も神の栄光の風景も，冬の嵐によって近づくのが困難な場所と見られるものとなっていて，こうした時季に近づくべき場所ではない，というとことなのであろう。しかも，神の契約の場，シナイ山から冬の嵐は旅人を追い出す。その時，旅人はターナーレスクを目のあたりにする。

> 突風はすぐと吹雪となり，これが生んだ効果は，今まで私が目撃したものの中で最もすばらしいものであった。霧が昇る太陽の前をすぎてゆくにつれ，巨大な雲の塊が平地の上に張り出し，谷はみたところ果しない深さの，ぼうっとした眺望の中に消えてゆき，山は雪をかぶって普通の高さの倍にみえ，朝日の光線をあびて，霧によって屈折し多数の光の発出点となったプリズムの色彩をともなって輝いていた[220]。

旅人と神の栄光の風景の間に，冬の嵐によるターナーレスクの風景が輝き出す。ここでは，むき出しの自然が退き，再び，気象（ミーティア）によってターナーレスクが現出していることが，旅人によってみとめられている。自然の力は，一方で，旅を阻害し，旅人をその求める世界や事物から隔て，他方で，美しい風景を旅人に与えていることはすでに述べた。冬の嵐の姿においてもそれが反復され強調されていることになる。それは，さらに，雷をともなう嵐において強調される。

大地は『ヨエル書』に描かれたような，滅びの日，主の日の[221]，「すべての物の終りを思わせるような」暗闇に覆われる。突然の嵐は，「最も荒れ果てた，最も恐ろしい壮厳さ」を呈する。シェイクスピアが「天から降る慈悲の象徴」であるとした雨は，「豪雨となって降り，山々を流れ下って襲いかかり，非常に強い風によって，厚い雲と霧の塊に変えられ」，さらに，稲妻と雷鳴

が襲う。「恐ろしい残響をくり返し」，「生々とした光をひらめかし，火の球を投げ落さんとしていた」，「全能の存在によって創り出され，「その言葉を行なう」」[222]嵐が旅人によってみつめられることになる[223]。こうした主の日の神の言葉の「伝達者」がシナイの山々の上に現われたとき，旅人は次のように語っている。

> 雷は鳴動を続け，ときおり，裂けた山々の間に恐ろしい破壊をともなう落雷があり，赤い稲妻がシナイの白髪の頭近くにひらめいていた。それは，詩人や画家のための，（おあつらえむきの）光景であった。……山々の間の雷鳴と稲妻は非常に崇高であり，舞踏会や炉辺での会話にとって，すばらしいものである[224]。

シナイの山々の間の雷が作る，崇高（サブライム）な美の世界が，旅人によってみとめられている。そして，それが，どこで語られるべきものであるかが明らかにされている。「孤独」に旅する者を襲う恐ろしい暗闇と雷鳴と閃光という描写[225]は，18世紀にエドマンド・バークが崇高美としてコード化，典型化していたもののくり返しとみられよう[226]。ここでは，神の言葉が示された世界と，ヨーロッパのサロンとの間を，崇高美を目撃し，描写する旅人が仲介する，という構図になっている。それは，古代のパルミラの廃墟の間でもくり返される。

> 奇妙な，荒々しい一日だった――刻々と風は強さを増し，大気の中を円柱に巻きつけるように砂を渦まかせ，暗く降り出しそうな雲が砂漠の縁の山々にそうように集まっていた。…突然（遺跡の）円柱の間を強風（ハリケーン）が通りすぎ，大気は厚い砂の霧で満たされた。…10ヤード先にあるすべてのものは，突然，目の前からかくされた。そしてすぐと風は凪ぎ，砂はシャワーとなって降り注いだ。稲妻の枝分かれした光の閃きが円柱の間に走ると，円柱の長い列が，再び，ほのかに現われ出た。そのあと，雷鳴が倒れそうな（廃墟の）壁をふるわせ，大つぶの暖かい雨滴が石の上に落ちた。そして再び風が吹き込むと，砂の雲を追い払い，空にかかる暗い雷雲の陰うつな色を反映して暗く陰うつな鉛色で覆われた砂漠を見通せる，障碍のない眺望がひらけた。枝分かれした稲妻があちこちへと走り，雷鳴の轟きが同時に色々な所から反響して聞こえた。雨は激しく降り，砂をたたき，全体の光景は崇高であった。……稲妻は見たこともない激しさで，幾度となく閃き，連続した光で昼のように明るくなった。稲妻の中で，円柱や廃墟や塔が，黒雲を背景にして，崇高な姿を現わした。砂漠の方を見やると，連続した稲妻が，広大な人気のない荒野の上に閃き，その姿は，想像し得る限りの，最も奇妙な，最も荒々しいものであった[227]。

ここでも崇高美を見つめる旅人が，古代の廃墟と，ヨーロッパの炉辺を仲介しているのは明らかであろう。詳細に調べ記述されるべき廃墟は嵐の闇の中に沈み，崇高の美として浮びあがっている。それは危険のないサロンにおいては，恐ろしくも魅力的な絵画として与えられている。もちろん，崇高美を生む嵐が，それを体験する旅人にとって危険なものと認められていることは言うまでもない。

嵐の危険さは，それが生む奔流・氾濫の破壊力として現出すると語られる。旅人は種々の場所で，過去の自然の，気象の破壊の跡を見つめることになる。

シナイの山岳地は降った雨をしみ込ませる土のない，堅いむき出しの土地のため，雨水は「山間の隘路を奔流となって流れ…大量の砂や岩石を運び，その抵抗し難い流出で，出会うことになるどんな障碍もこなみじんに砕いていった」と語られる[228]。そうした洪水（セイル）の一つがヨーロッパ人によって体験され，パーマーがそれを紹介している。それは，キャンプのアラブ人40人の命をうばい，多数の家畜をのみ込んだ奔流であったという。巨大な漂石を小石の如く押し流し，すべてを破滅へと急がせた「その洪水による荒廃の跡」は2年ほど後でも，はっきりと残っていたとされている。

> むき出しの花崗岩の山々に降る豪雨をともなう雷の嵐一度で，こうした恐ろしい結果を生むのに充分であり，乾いた平坦な谷を，短時間で轟々と鳴る川に変え，ダヴィデが『詩篇』18篇で描き出した，恐ろしい光景を現実化するのに充分であろう[229]。

敵を破滅させた神の力である嵐は，シナイの山地に，自然の猛威をふるわせる，とパーマーは読みとる。神はこの洪水から信仰の者ダヴィデを救われたというのが『詩篇』18篇の詩なのだから，シナイに残る破壊の気象（ミーティア）の跡の象徴性は明示されているとみられよう。荒廃の風景は，ここでも，不信仰の者への神の怒りの風景を意味するものとなっている。

洪水は，その跡を示すのみならず，現実に旅人に襲いかかる。不意に襲いかかった雨と雹は，ごくわずかの時間でメッカ付近の涸れ谷を奔流に変えることになる。一滴の水もなかった谷は，5フィートの幅の，3フィートの深さの急流となって旅人を立往生させる。山は滝を作り，雷雨は続き，3時間もブルクハルト一行を足止めする[230]。

ピラミッドで発掘中のレプシウスも，豪雨，降雹に襲われる。嵐はテントを倒し，奔流は「巨大な蛇がその餌に襲いかかるように」キャンプを押し流し，スフィンクスの後方に大きな湖を作って，「本や絵やスケッチやリネンやすべての道具を」運んで行った。嵐がおさまるや「太陽が再び輝き出し，この洪水のシーンの終了が，壮麗なすばらしい虹によって宣言された」[231]。もちろん，洪水の終りの虹は，神がノアに約束したこと，「水はふたたび，すべて肉なる者を滅ぼす洪

水とはならない」という契約のしるしであった[232)]。伝統的には，この契約の虹は神の恩寵であり，天と地を仲介し調和させるものであり，キリストによってもたらされた契約の預徴（タイプ）とみられていた[233)]。しかし，この19世紀の考古学者にとって，虹は旅の困難さの一つの終りを表示するものでしかないように思われる。自然の力が作り出す動乱が平穏さをとりもどす，そのことが虹によって告知されているとみられているにすぎないようだ。ダウティも嵐の後の三重の虹の出現を，そのように言及している[234)]。大気の動乱の崇高な風景の後に現われる，平穏の，平和の風景がみつめられる。信仰の確証でもなく，信仰の疑惑でもなく，安らぎと光の美しい現象がみつめられている。光と色彩の戯れの虹の描写は，すでに，紅海上での一日の移り変る風景として，バートンがみつめていたことを指摘しておいた。これらの虹の描写が，イギリスの風景の中に置かれ「超越のサイン」を帯びることが指摘されている，ターナーの虹の風景に[235)]，いかなる関係を持つのか必ずしも明らかではないが，ターナーの風景の平穏さ，調和といったものは共通するものとみることができるように思われる。こうした自然の調和の虹に対して，プレ＝ラファエル派の画家，ウィリアム・ホウルマン・ハントの『犠牲の山羊』（最初の画）は，死海の岸に山羊を置き，虹を荒涼たる風景の中に描いていて，苦難の中の，死と直面したキリストを表現しており[236)]，虹は神への信仰に深い関わりを持つものであることが示されている。そこでは，虹は，苦難の終りではなく，再生への希望を意味するものとなっている。同じように荒涼たる死海の風景の中に虹をみとめ，旧約の世界を想起しつつキリスト者たるを確認するという言説を，ソルシィの次の文章にみることができると思われる。

> （我々が死海の南岸を進んでいたとき），カナーンの山地から嵐がやって来てアスファルトの湖の真上…を襲った。暗灰色の雲が海と空を一つにし，この深い谷の北側をすべて完全な暗闇で覆った。突然，まばゆい輝きと豊かに彩られた壮麗な虹が，死海の両岸の間に，全能の神の手によって投げられた巨大な拱道（アーチウェイ）を形どって現われた。……
> 我々がワディ＝エ＝ズエラの最初の上り坂を登りはじめたとき，大きな黒雲が西風にあおられて頭上をこえ…死海の上を（東の）…方角へ向い，さらに，モアブの山地の斜面にそって上昇してゆき，すぐと眺望がひらけ，とけた鉛のような広い動きのない水の広がりが見渡せた。嵐が東へ急ぐにつれて，西の空は再び澄んで輝きはじめた。そしてしばし，没する太陽がカナーンの山々の上に燃えるような光線を投じ，それは，ほとんど，モアブの山地の頂きを巨大な火災の炎で覆うようにし，その一方，これら堂々たる山々のふもとはインクのような黒さを示していた。上は暗く低くたれこめたような空で，下はにぶい鉛のような灰色をした金属が広がったような海。我々の周囲は沈黙の荒野，全き荒廃。遠い西の空は，明るく，雲のない空で祝福の地の上に輝き，（そこへと向う）我々は，永遠に呪われ

た（モアブの）土地から逃げ出しつつあるように思われた[237]。

嵐は西から東へ，祝福の地から呪われた地へと移り，旅人は東から西へと移り行く。その上を虹がかかる。虹は，二つの世界を分けるとともに結びつける。二つの世界，祝福の地と呪いの地は，神が現出させたものであって，それが自然の力を通して行なわれたものであることを，嵐と虹という形で表出している。そのことを，ソルシィは読みといているとみられよう。キリスト者たる旅人は祝福の土地に向って急ぐ，モーセに示された土地へと急ぐイスラエル人の如く。従って虹はどちらの道をも指示していない，ということになろう。道をとるのは神に従う人間＝旅人なのだ，ということがここでは強調されていよう。虹は嵐の終りということでなく，苦難と祝福の二つの世界の，自然の中での関わりを意味することなのであろう。それを読みとくのは，とるべき道をとる旅人自身の問題でありつづける。嵐も虹も，それを読みとくべき場所に現われるものでありつづける，ということなのであろう。

iii　難破

19世紀の初めの，いくつかの難破事件が，芸術家の心を動かしている。東インド会社の船はジョン・ワーズワースの命をうばい（1805年），弟のウィリアムに悲歌をうたわせ，ボストンを出た帆船ポリィの191日にわたる漂流（1811－12年）はポーをして『アーサー・ゴードン・ピムの物語』を書かしめ，フランスのフリゲート艦メドゥサの難破と生存者の悲惨な筏による漂流（1816年）はジェリコーをして『メドゥサの筏』を描かせていた[238]。船で旅する者は，こうした難破を意識しつづける。

中東の旅では，海とナイルで，嵐にあい，難破の危険にさらされることになる。砂漠にあっては猛暑の迷路の中で水を失なって危険にさらされるのに対し，大きなうねりの中では過剰な水によって危険にさらされる。

スミルナからキプロスへ向う帆船の中で，キングレイクは嵐につかまる。

> すぐに，2本マストの帆船の舳を荒れた海がとらえ，（船は）波の間に挟まったように動けなくなった。船はその舳を海の中に沈め，その船板をふるわせ，そして，再び，勇ましく頑強に抵抗する海の上に船首の斜檣全体で立ちあがった[239]。

そこで，乗組員は船長をかこんで鳩首会談をはじめ，進路変更を船長に求め，船長は「目を火のように輝かせ，体を感動でふるわせて」雄弁に語り，乗組員に勇敢な行動を求めた。心を動揺さ

せ，ためらい，決意し，またためらいつつ，船長の説得と嵐の恐怖に宙づりにされる乗組員達。それは水夫の集まり，というよりは，「ギリシア市民の集会」であり，「古きデロスの（民主的な）精神が生きていた」し，これら「アテネ人」に向って船長は「風上側斜め前方でマケドニアのフィリポスのように大声で叫け」んでいたと語られている。ギリシア人の水夫達の民主的な意見に対し，船長の勇敢さの方が「自然な勝利を得た」とされ,安全な海へと導かれることになる[240)]。強い指導力の方に安全な航行の保証をキングレイクは認めているとみられよう。不正確な指示が危険であるのは言うまでもないし，水夫をまとめあげる力が失なわれれば，船は進路を確かなものとはなし得ないことも言うまでもない。

中東の海岸が見えて来たとき，嵐は船が，目的地に近づくことを阻む。良い天候の中，順風をうけて，ウィルソンの乗る船は，アレクサンドリアに近づき，有名なポンペイの柱が見えてくる。その時，強い逆風が吹き出し，船は間切って進むことになる。しかし，夜に入って，美しい天体のショーがながめられ，航行は順調であった。

> 空はすばらしく穏やかになり，その瑠璃色の深さは非常に澄んでいて美しく，星は輝き，我々の湿った空気の中に住む者には，適切には伝えられない輝きであった。この特別な海岸の天空の眺めが創造の偉大さを最も壮麗に表わすものと，永く記憶にとどめるであろう。そこなわれることのない水晶の天球の，輝く球体を見上げる時，聖なる書の言葉（「ああ，神の目には，月さえも輝きがなく，星もきよくない」という言葉）で，感嘆せざるを得ない[241)]。

完全に調和した神の球体がみつめられるものの，地上に眼差しがもどされるや嵐がはじまる。逆風は力を増して大しけ（テンペスト）になり，船は食糧不足を心配させつつ沖へと離される。帆をたたんだむき出しのマストは強風にさらされる。

> こんな時の雷鳴は恐ろしいものであった。そして時々，帆船は稲妻の光の中につつまれたように見えた。この夜は本当に恐ろしく，記憶に残るであろう。雲間の星々はその進路からよろめき出したように見え，（船の）周囲の大波はきらきらと光りとび散った。要するに，波の間の穴へとび込むようにうめき声を立てていた船のデッキに，船長や水夫達は，非常な，あらん限りの困難の中，足をしっかりふみしめていた。そして，我々すべては，永遠の世界へ急ぐことになるはずだと結論づけていた。すべては，本当に，我々が全くの人間の力の外にあって，全能の存在の手にまかされていた，ということを明らかにしていた[242)]。

こうした嵐のシーンに，ウィルソンは『イザヤ書』の言葉を読みといている。全能の神の手の中の人間であることの確認。そして，この同じ海でヨナが嵐と出会ったことが想い起こされる。嵐がおさまると,ヨナを飲み込んだような巨大な「魚」が船のまわりを戯れているのが目にされる[243]。誰もヨナの如く供犠にされるということもなく，嵐はおさまる。神の導きの手は見失なわれてはいないということか。パニックに陥ることなく，難破することもなく，中東の地は旅人に開かれる。キングレイクの船の船長のような，人の手による困難の克服は，ここにはみられない。

ナイルでも，旅人は自然の力に全くゆだねられることになる。旅人はミニエ近くで強風にあおられる。アラビア側の崖の下でナイルは逆巻き，強風の吹きつける危険な水路に船が入ってゆく。

> 蒼ざめた月が，時々，我々の様子をながめるように，ぼろぼろになった雲の背後から顔をのぞかせ，(船が) 陰うつな狭い峡谷に入ったときには，風は更に荒々しくなってきた。大河が轟々と音を立てて通る荒々しいアフリカの峡谷，とは言え，けわしい崖に裂かれ，あわ立つ水に覆われた船を犠牲とするように猛然と襲いかかる疾風の鋭い音に圧倒された様を，ソファーにくつろぐ読者は自ら描かれよ。今や途を失った突風は急速に通り過ぎ，帆に逆風をあて，苦闘している帆船を，ごぼごぼと音を立てている水の中に，メイン・マストの所まで沈めた。そこで，他方向からの突風が川を遡って烈しく吹きあげ，我々をくるったように，手におえぬほどに，洞のある崖へと押しやった[244]。

どうすることもなく茫然と立ちつくしたアラブ人の水夫達，破滅へとひきづり込もうとしている帆，烈しく動揺する船。水夫達は船をすててナイルに身を投じようとし，旅人自身は，「腰をおろし，煙草を喫い，事態がどう終結するのかといぶかっていた」と対照的に描かれる。船は舳を沈め，波の上できりきり舞いしたかと思うと，突然，嵐は，谷の深い裂け目からその船を放り出し，ひと仕事終えたかのように「自分の家へ戻っていった」。この地域に嵐は棲む，とアラブ人達は考えている。ここを通り過ぎると，雲は去って，月は「温和にほほえみかけ」てきたと述べられる[245]。

ナイルを吹き下ろす風は，ときに，船をコントロールできぬ速度で流れ下らせる。水夫達は陸にあがって，ロープで船をひきとめようとするものの，船は回転しながら下流へと急ぐ。途中，幾隻もの船の一団につっこみ，その中から死への道づれをさがし出す。「死の支配にとらえられたように」流れ下り，水底へ沈む。

> 風の烈しさ，船の速い動き，衝突，岸や船上でのアラブ人の荒々しい姿…そうしたものすべてが，奇妙な，最も活気ある光景を形作っていた[246]。

他の船の難破は活気のある光景であるとされ，ナイルではアラブ人は安全だと述べられている。トーマス・クックの旅行団も，こうした光景の犠牲となっていた[247]。嵐にあった船は，一度はこうした光景にまきこまれねばならないかの如く，「ナイルで目にしたものの中で最も興奮させられた出来事」[248]がみつめられる。そうした中で，リンゼイは，いささか珍しい難破を経験する。

古代より，逆巻く水，巨大な漂石，矢のような流れを作ると言われてきた瀑布（カタラクト）は[249]，ポコックをはじめ多くの近代の旅人を失望させてきた[250]。瀑布というより早瀬といった程度の場所は，そこを通ることを危険なものにはしていない。「ナイルの瀑布で難破した旅行者はほとんどいない」とリンゼイも述べているほどである[251]。そのリンゼイが，第一瀑布で難破を体験するに至る。急な流れに押された船は，水中の岩に横腹をぶつけ，川の中ほどの孤立した岩の所の浅瀬・砂州に乗りあげてしまう。水が非常に急速に船内に侵入して来て，人々は荷物をその岩の上に移した。浅瀬から離れた船をロープで岩にむすびつけることができたとき，旅人は「極めて尋常でない光景……全くの荒々しい光景」を目にする。

> …我々の周囲に，暗い紫色の雲が低くたれこめ，雨が降り（これ自体，上エジプトでは驚きであった），稲妻が閃き，我々の立つ小島の両側を勢いよく流れてゆく急流の上を雷鳴が轟いていた…[252]。

このピクチュアレスクが，前に見た嵐の崇高美に重なることは明らかであろう。かたわらには，「狂人のようにわめき…子供のように泣く」船長がいる[253]。あわれな人間と，荒々しく崇高な自然が対比される。難破した旅人も船も助かり，旅は再びつづけられた。ナイルで難破した船の水夫達の死をリンゼイは他の船の例で語っていて，ナイルと言えども甘くみるべきものでないことを確かにしているが，他の旅人と同様に難破で死者が出るという事態は体験していない。

旅人は砂漠で白骨化した動物達の死体をながめつつ旅をしていたように，海岸で打ちあげられた難破船をながめる。それらの残骸は「好ましく，美しい海面の下に，暴風雨と大しけを生む力が潜んでいることを物語っていた」[254]と述べられている。ナイルで難破の危険を語っていたウォーバートンは，ルイ・ナポレオンの依頼でニカラグアで運河開削の可能性を調べに行く途中の船で命を落すことになる（1852年）[255]。海岸の難破船は，旅をする者の墓標となるとみられよう[256]。それは，一歩まちがえば，パルグレイヴの運命であったことが知られている[257]。

1863年３月，パルグレイヴは，アラビア半島マスカットに向かう船の中にあった。その日の午後は，「不吉なものを予示する，死の静寂の中」不毛のリーフの間にあった。夕方，軽い南西の風にマスカットへ向うことを期待するが，風は強さを増し，「どんな航海法も無効にするほどの，徹底的な嵐となった」。ぼんやりとした霧の中を，船は帆をたたんで疾走していた。夜10時頃と思

われる頃，突然船が傾く。船倉に大量の水が流れこんだためであった。船長の命令で荷を投棄しはじめるや否や，メイン・デッキ上を「青い燐光のさざ波が走」り，水は舷を越えた。パルグレイヴは後甲板に登り，神に祈りつつ海に飛び込む。「絶望の号泣が最後の音として耳に達し」，「荒れ狂う海原の中に，後檣の頭が見え，見ているうちにらせん運動で沈んで見えなくなった」。その時，ボートが，パルグレイヴや船長を含めた12人を助けあげる。それは「死刑執行延期の箱船」のようであった。更に３人が泳ぎつくが，ボートにつないだ帆桁（ヤーダーム）の端が３人に与えられる。風は強さを増し，荒れ狂った波が巨大な怪物のように襲いかかって来ていた。「すべては，操舵と，オールによって与えられるバランスと支持に依っていた。そしてさらに，この海原を創った神の摂理に依っていた」と旅人は考える。星によって方位を定め，針路を確定したのはパルグレイヴ自身であり，水夫達はそれに従った。ヤーダームの１人が，この間に波にのまれる。ボートに救いあげられるのを求めたのに対し，水夫がその手を水夫の１人がはぎとったためであった。ボートは限界に達していた。沈みはじめたボートから４人が海に飛び込む。それでなんとか浮き上る。今や９人がボートの上にあった。ヤーダームをつなぐロープも切れ，月の光の中に５人の泳ぎ手が浮かびあがる。それも一瞬で，巨大な波が彼らの姿をかくす。

残った者はボートを海岸へと漕いだ。目の前に巨大な黒い岩が突き出る。水夫達はこの岩をめざし，パルグレイヴは「破滅」を悟る。茫然自失した船長達を目覚ませ，左手に見える砂浜へ針路をとらせることに成功する。岸から100ヤードの所に，さらに危険な白波の列が滝のようにうねり，ボートは「夜の鬼火のように輝く」波の列によって転覆した。それからは死に物狂いで泳ぐことになる。それでもなんとか，９人全員が浜にたどりつく。

> …皆は砂の上に平伏し，多くの危険と多くの仲間の命が失なわれた後，新たなる命を許されたことを，天に感謝した。そして立ちあがり，彼らは互いに抱きあい，笑い，叫び，むせび泣き，踊った。……若いオマーンの水夫が，「我々は，この日を，我々の誕生日とみなそう。これは死後の新たな生命なのだ」と語った[258)]。

ひとたび助かったことが分かるや，旅人は，助かった人々から身をひきはなし，外からながめているように思われる。もちろん，この遭難の間，彼一人が冷静であり，沈着であり，救護の途を見通せていたことが述べられていた。導きとなる星を見つけ出し位置を定めたのは彼一人であったと語られている。希望を見出し，自暴自棄の船長や水夫達を救えたのは，彼の勇気と知力ということなのであろう。彼の自らの行動の描写に，この時代の「キリスト者の男らしさ（クリスチアン・マンリネス）」を見るのは容易であろう。旅行者が期待されたように行動してみせるという言説については，後に再びふれることになろう。ここでは，死の危険の中に巻きこまれ，現地の人々とともに行動しつつも，

一人独自の途をみつめ，救済の狂喜乱舞から離れている旅人の姿の描写に注目しておくにとどめよう。

旅行者達の描き出す中東の風景において，荒廃は神の怒りに依るものであった。その怒りの力は，気象（ミーティア）を通じて，死の世界を，死と隣りあわせの世界を現出して来た。そこで人は困窮し，幻惑の生をつむぐ。自然は幻を作り，荒廃する。そうした自然を，気象を読みとける旅人のみが，その美を味わい，また生きのびる手段を持ち得ていると語られる。旅人は，現地の人々の如く荒廃に生きることはなく，その向うにある生，信仰の生をみつめる，という姿をとるものとして描写される。気象が幻と荒廃を生んでいるとき，そこに居る人々は，旅の言説の中でいかなる状況にあったと語られるのであろうか。次に，このことをみることにしよう。

3 章（気象 —— 自然論）　注

1）高知尾，1991参照。

2）『創世記』3章，17

3）『創世記』6章，11

4）Abrams，1971，pp.99－101．Thacker，1983，p.4．Reed，1983，pp.14－15.

5）Reed，1983，p.9．

6）ミルトン，1981，95頁。Reed，1983，pp.36－37.

7）Stafford，1984，p.401.

8）Carnochan，1977，p.163.

9）Reed，1983，pp.94－100 & 133－134.

10）Reed，1983，pp.287－288.

11）以下は Stafford，1984による。

12）ヨーロッパの伝統的宇宙観における構成要素（エレメント）についての考えからいえば，

　　5）地の現象——地震，火山，など。

　　6）天の現象——流星，など。

の二つの項目を加わえるべきであろう。もちろん，この二つの項目に分類されるべき現象は，そのように把握されている，と考えることができるからである。

13）Burton & Drake，1872，vol.Ⅰ，p.117．Doughty，1888，vol.Ⅰ，p.74．Burton，1855－6，vol.Ⅰ，p.382．Robinson，1841，vol.Ⅱ，p.97．Burckhardt，1829，pp.240 & 398.

14）Doughty，1888，vol.Ⅱ，pp.233－234.

15）Robinson，1841，vol.Ⅱ，p.98.

16）Doughty，1888，vol.Ⅰ，p.74．Burton，1855－6，vol.Ⅰ，p.383．Robinson，1841，vol.Ⅱ，p.99．Burckhardt，1829，pp.240 & 398．Burckhardt，1822，p.604.

17) Robinson, 1841, vol. II, pp.99 & 282.

18) Burckhardt, 1822, pp.274－275.

19) Wilson, 1823, p.79.

20) Palmer, 1871, pp.249－250.

21) Burton, 1855－6, vol. I, pp.207－209.

22) Edwards, 1877, p.82.

23) Warburton, 1845, vol. I, p.303.

24) Stafford, 1984, p.280.

25) Porter, 1855, vol. I, p.154.

26) Palmer, 1871, p.216.

27) Porter, 1855, vol. I, p.154.

28) Burckhardt, 1819, p.193.

29) Palmer, 1871, p.216.

30) Lepsius, 1853, p.142.

31) Belzoni, 1822, vol. I, p.304.

32) Lindsay, 1828, vol. I, pp.64－68. Kinglake, 1844, pp.167－169. Warburton, 1845, vol. I, pp.149－153.

33) Palmer, 1871, p.217.

34) Porter, 1855, vol. I, p.154.

35) Porter, 1855, vol. I, p.199 & 374.

36) Porter, 1855, vol. I, pp.374－375.

37) Porter, 1855, vol. I, p.154.

38) Wilkinson, 1843, vol. II, pp.158－161. Bartlett, 1849, pp.181－182.

39) Edwards, 1877, p.435n. メムノンの生と死は，アポロドーロス，第3巻，XII. 4，摘要，V. 3（邦訳，153，192頁）参照。

40) Lepsius, 1853, p.257.

41) Warburton, 1845, vol. I, p.368.

42) Lindsay, 1838, vol. I, p.150.

43) Lepsius, 1853, p.257.

44) Edwards, 1877, p.435n.

45) Burton, 1879, vol. II, p.63.

46) Warburton, 1845, vol. I, p.368.

47) Stephens, 1837, p.114.

48) Lepsius, 1853, p.257. Wilkinson, 1843, vol. II, p.160. なお，地震説はストラボンに由来する。

49) Jebel el - Nákús, Jebel Nágús と表記されている。ナークースは鐘の意。

50) Palmer, 1871, pp.218－222. ミディアンにある「うめく砂の丘」について，バートンが，この砂山

と比較して述べている。Burton, 1879, vol. I, pp.65－66.

51) Kinglake, 1844, pp.152－153.

52) Stafford, 1984, pp.59－183.

53) もちろん，砂漠は desert のことで，砂によって特徴化されたそれをのみ示すものではない。和辻，1963，43－45頁参照。

54) Stafford, 1984, pp.151, 154 & 160.

55) Stafford, 1984, pp.355－356.

56) Stafford, 1984, pp.368－369.

57) Stanley, 1858, p.487. 聖書は以下参照。『申命記』3章，17，『ヨシュア記』3章，16，『イザヤ書』35章，1，『エレミア書』50章，12。

58) Wilson, 1823, p.244.

59) Wilson, 1823, p.245.

60) Kinglake, 1844, p.106.

61) Robinson, 1841, vol. II, p.219.

62) Stephens, 1837, p.395.

63) Wilson, 1823, p.252.

64) Stephens, 1837, p.395.

65) Wilson, 1823, p.257.

66) Palmer, 1871, p.464.

67) Kinglake, 1844, p.106.

68) Palmer, 1871, p.464.

69) Irby & Mangles, 1823, pp.454－455.

70) Wilson, 1823, p.256.

71) Robinson, 1841, vol. II, p.596.

72) Stephens, 1837, p.237.

73) Stephens, 1837, p.292.

74) Robinson, 1841, vol. II, pp.598 & 600－601.

75) Stephens, 1837, p.292.

76) Wilson, 1823, p.257.

77) Wilson, 1823, pp.258－259.

78) 『創世記』34章，8。

79) 『民数記』20章，18－21。

80) Diodorus Siculus, II, p.43.

81) Stephens, 1837, p.234.

82) Stephens, 1837, p.237.

83) Stephens, 1837, p.273.

84) Lindsay, 1838, vol.Ⅱ, p.46.

85) Palmer, 1871, p.430.

86) Burckhardt, 1822, p.432. Robinson, 1841, vol.Ⅱ, p.551.

87) Burckhardt, 1822, p.436.

88) Robinson, 1841, vol.Ⅱ, p.551.

89) Palmer, 1871, p.430.

90) Palmer, 1871, p.431.

91) Stephens, 1837, p.259.

92) 例えば,『イザヤ書』34章, 5－6,『エレミヤ書』49章, 8－16,『エゼキエル書』25章, 13, 35章, 3,『オバデヤ書』6－9。

93) Stephens, 1837, p.259.

94) Lindsay, 1838, vol.Ⅱ, p.46.

95) Stephens, 1837, p.234.

96)『創世記』27章, 39。

97) Stephens, 1837, p.234. Palmer, 1871, p.431.

98) Porter, 1855, vol.Ⅰ, p.163.

99) Porter, 1855, vol.Ⅰ, p.22.

100) Warburton, 1845, vol.Ⅱ, p.333－4.

101) Robinson, 1841, vol.Ⅰ, p.259.

102) Burton, 1855－6, vol.Ⅰ, p.150n.

103) Belzoni, 1822, vol.Ⅱ, p.89.

104) Doughty, 1888, vol.Ⅰ, p.95.

105) Porter, 1855, vol.Ⅰ, p.163. Robinson, 1856, p.440. Robinson, 1841, vol.Ⅰ, p.259. Stephens, 1837, p.188. Doughty, 1888, vol.Ⅰ, pp.95－96.

106) Burckhardt, 1822, p.590.

107) Lindsay, 1838, vol.Ⅱ, p.167.

108) Porter, 1855, vol.Ⅰ, p.22.

109) Porter, 1855, vol.Ⅰ, p.163.

110) Porter, 1855, vol.Ⅰ, p.22.

111) Stephens, 1837, p.213.

112) Stephens, 1837, p.213.

113) Porter, 1855, vol.Ⅰ, p.22.

114) Burton, 1855－6, vol.Ⅰ, p.149.

115) Belzoni, 1822, vol.Ⅱ, p.90.

116) Burckhardt, 1822, p.589.

117) Lindsay, 1838, vol.Ⅱ, p.13.

118) 『民数記』11章，35－12章，16。

119) Lindsay，1838，vol.Ⅱ，p.13.

120) Stephens，1837，p.213.

121) Lepsius，1853，p.134.

122) Edwards，1877，p.235.

123) Edwards，1877，p.236.

124) Lepsius，1853，p.215.

125) Burckhardt，1822，p.454.

126) Palgrave，1865，pp.62－63.

127) Palgrave，1865，p.340.

128) Robinson，1841，vol.Ⅰ，p.55. Burckhardt，1822，p.460. Wilkinson，1843，vol.Ⅰ，p.300.

129) Burckhardt，1822，pp.460－461.

130) Kinglake，1844，p.106. Warburton，1845，vol.Ⅱ，p.230. Saulcy，1853，vol.Ⅰ，pp.166－167. Palmer，1871，p.464. Lindsay，1838，vol.Ⅱ，p.66.

131) Saulcy，1853，vol.Ⅰ，p.167.

132) Kinglake，1844，p.106.

133) Saulcy，1853，vol.Ⅰ，p.167.

134) Palmer，1871，p.464－465. この申命記の言及は，モーセのながめたパレスティナへの言及にあらわれたものである。

135) Josephus，1981，p.273.（『ユダヤ戦記』Ⅳ.）

136) Robinson，1841，vol.Ⅱ，pp.236－237. Irby & Mangles，1823，p.450. Burckhardt，1822，p.392. Saulcy，1853，vol.Ⅰ，p.187.

137) Robinson，1841，vol.Ⅱ，p.237.

138) Thacker，1983，pp.20－21. Stafford，1984，pp.292－293.

139) 例えば，Porter，1855，vol.Ⅱ，pp. 9 & 290. Burton & Drake，1872，vol.Ⅱ，p.24. Saulcy，1853，vol.Ⅱ，p.75.

140) Burton，1879，vol.Ⅰ，p.175.

141) Stafford，1984，p.294. Warburton，1845，vol.Ⅱ，p.123 & n.

142) 『列王紀　上』18章，19－46。

143) Warburton，1845，vol.Ⅱ，p.123.

144) Robinson，1841，vol.Ⅱ，p.482. Warburton，1845，vol.Ⅱ，p.237. Saulcy，1853，vol.Ⅰ，pp.269－270.

145) 『創世記』19章，12－28。

146) 『創世記』19章，24－28。

147) Robinson，1841，vol.Ⅱ，p.605.

148) Greene，1982，pp.32－41. ホームズ，1983，Ⅰ，60－62頁。

149) Greene，1982，pp.28 & 62－63. Stafford，1984，pp.245 & 254. ホームズ，1983，Ⅰ，62－63頁。

Thacker, 1983, pp.145－151.

150) Greene, 1982, pp.63－76 & 83－84.

151) Robinson, 1841, vol.Ⅱ, pp.606－608 & 669－675. この通信は1839年のことである。

152) バートンがこの人の本を旅行中に所持していたことが分っている。cf. Burton, 1879, vol.Ⅰ, p.197.

153) Greene, 1982, pp.93－121.

154) Porter, 1855, vol.Ⅱ, pp.78 & 241. Burton & Drake, 1872, vol.Ⅰ, p.163. Robinson, 1841, vol.Ⅲ, p.367. Doughty, 1888, vol.Ⅰ, pp.423, 429 & 452.

155) Burton & Drake, 1872, vol.Ⅰ, p.164. Robinson, 1841, vol.Ⅲ, p.313. Doughty, 1888, vol.Ⅰ, pp.175 & 442.

156) Doughty, 1888, vol.Ⅰ, p.427 ; vol.Ⅱ, p.87.

157) Doughty, 1888, vol.Ⅰ, p.429.

158) Doughty, 1888, vol.Ⅰ, pp.465－466.

159) Porter, 1855, vol.Ⅱ, p.241.

160) Doughty, 1888, vol.Ⅰ, p.427.

161) Doughty, 1888, vol.Ⅰ, p.442.

162) Burckhardt, 1829, p.358. Irby & Mangles, 1823, p.377. Porter, 1855, vol.Ⅱ, p.242. Doughty, 1888, vol.Ⅰ, p.451.

163) Porter, 1855, vol.Ⅱ, p.238.

164) Doughty, 1888, vol.Ⅱ, pp.85 & 88 ; vol.Ⅰ, p.427.

165) Burton & Drake, 1872, vol.Ⅰ, p.164. Porter, 1855, vol.Ⅱ, pp.237 & 241－2. Doughty, 1888, vol.Ⅱ, p.85 ; vol.Ⅰ. p.427.

166) Doughty, 1888, vol.Ⅰ, p.452.

167) Porter, 1855, vol.Ⅱ, p.238.

168) Irby & Mangles, 1823, p.453. Palmer, 1871, p.467. Warburton, 1845, vol.Ⅱ, p.236. Robinson, 1841, vol.Ⅱ, pp.253－254.

169) Burckhardt, 1822, pp.393－394.

170) Josephus, 1981, pp.272－273.（『ユダヤ戦記』Ⅳ.）Diodorus Siculus, Ⅱ, pp.43 & 45.

171) Josephus, 1981, p.273.

172) Robinson, 1841, vol.Ⅱ, pp.229－230.

173) Wilson, 1823, p.260.

174) Warburton, 1845, vol.Ⅱ, pp.236－237.

175) Robinson, 1841, vol.Ⅱ, p.605. 但し, [ ] 内は筆者の補入。

176) Robinson, 1841, vol.Ⅱ, pp.229－230.

177) Lindsay, 1838, vol.Ⅱ, pp.83, 88 & 108－109.（リンゼイは, 当時ムーアという人物が遺跡の倒壊を経験していた, と述べている。）Robinson, 1841, vol.Ⅲ, pp.186, 253－255, 321－322, 368－369 & 471－475. Saulcy, 1853, vol.Ⅱ, pp.432 & 499.

178) Stafford, 1984, p.344.

179) Saulcy, 1853, vol. II, p.432.

180) Doughty, 1888, vol. II, p.196.

181) Lindsay, 1838, vol. I, pp.296－297. Burton, 1855－6, vol. II, p.62. Lepsius, 1853, p.142.

182) Burckhardt, 1819, p.77. Irby & Mangles, 1823, p.172.

183) Stephens, 1837, p.293.

184) Burton, 1855－6, vol. II, p.62.

185) Lindsay, 1838, vol. I, p.297.

186) cf. Lyons, 1971, pp.97－104.

187) Doughty, 1888, vol. I, p.91.

188) Doughty, 1888, vol. I, p.92.

189) Stephens, 1837, p.171.

190) Burckhardt, 1819, pp.198－202.

191) Lepsius, 1853, pp.282－285.

192) Belzoni, 1822, vol. I, p.303. Madden, 1829, vol. I, p.218. Lane, 1836, p.494.

193) Burckhardt, 1819, p.352.

194) Burton, 1878, p.20 n.

195) Burckhardt, 1819, p.204. Madden, 1829, vol. I, p.218. Laborde, 1836, p.210. Palgrave, 1865, p.12. Doughty, 1888, vol. I, p.536.

196) Burckhardt, 1819, p.204. Palgrave, 1865, p.11. Stephens, 1837, p.155. Legh, 1816, p.101.

197) Legh, 1816, p.101. Belzoni, 1822, vol. I, p.303. Laborde, 1836, p.210. Kinglake, 1844, p.179. Palgrave, 1865, p.12. Robinson, 1841, vol. I, p.288 ; vol. II, p.429.

198) Laborde, 1836, p.210. Lindsay, 1838, vol. I, p.294. Palgrave, 1865, p.12. Robinson, 1841, vol. I, p.288 ; vol. II, p.505.

199) Belzoni, 1822, vol. I, p.304. Stephens, 1837, p.155. Robinson, 1841, vol. II, p.505. Burckhardt, 1819, p.385.

200) Legh, 1816, pp.101－102. Lindsay, 1838, vol. I, p.294. Madden, 1829, vol. II, p.193. Robinson, 1841, vol. I, p.288. Lepsius, 1853, p.224. Palmer, 1871, p.103.

201) Palmer, 1871, p.103.

202) Belzoni, 1822, vol. I, p.304.

203) Burton, 1855－6, vol. II, p.69.

204) Palmer, 1871, p.103.

205) Edwards, 1877, p.406.

206) Lindsay, 1838, vol. I, p.294. Laborde, 1836, p.210. Burckhardt, 1819, pp.205－206. Palgrave, 1865, pp.11－12.

207) Burckhardt, 1819, p.385. Stephens, 1837, p.153. Robinson, 1841, vol. I, p.289 ; vol. II, p.430. Palmer,

1871, pp.103 & 241－242.

208) Burton, 1879, vol. I, p.197.

209) Doughty, 1888, vol. I, p.536 ; vol. II, p.492.

210) Madden, 1829, vol. I, p.218 ; vol. II, pp.192－193.

211) Madden, 1829, vol. II, p.193.

212) Burton, 1855－6, vol. I, p.247 ; vol. II, p.69.

213) Madden, 1829, vol. I, p.218.

214) Robinson, 1841, vol. I, p.289. Doughty, 1888, vol. I, p.536.

215) Palmer, 1871, p.444.

216) Lindsay, 1838, vol. II, p.210.

217) Wilson, 1823, p.430.

218) Burton & Drake, 1872, vol. I, p.86.

219) 『エゼキエル書』17章, 22－23, 31章, 8－9。

220) Palmer, 1871, p.127.

221) 2章, 2。

222) 『詩篇』148篇, 8。

223) Wilson, 1823, pp.478－480.

224) Stephens, 1837, p.212.

225) Wilson, 1823, p.479.

226) Burke, 1757, IV, xiv－xvi. Thacker, 1983, pp.77－79.

227) Addison, 1838, vol. II, pp.180－181.

228) Stephens, 1837, p.211.

229) Palmer, 1871, p.151.

230) Burckhardt, 1829, p.92.

231) Lepsius, 1853, pp.53－54.

232) 『創世記』9章, 15－17。

233) Landow, 1982, pp.159－160. 預徴(タイプ)については後述。

234) Doughty, 1888, vol. II, p.330.

235) Heffernan, 1984, pp.32－34.

236) Landow, 1982, p.174.

237) Saulcy, 1853, vol. II, pp.526－527.

238) Huntress, ed., 1974, pp.131－162.

239) Kinglake, 1844, p.55.

240) Kinglake, 1844, p.55.

241) Wilson, 1823, p.11. (　) 内の聖書の引用は『ヨブ記』25章, 5。

242) Wilson, 1823, pp.12－13.

243) Wilson, 1823, pp.13－14.

244) Warburton, 1845, vol. I, p.188.

245) Warburton, 1845, vol. I, pp.188－189.

246) Stephens, 1837, p.47.

247) Edwards, 1877, p.399.

248) Stephens, 1837, p.47.

249) Diodorus Siculus, I, pp.106－107.

250) Stafford, 1984, p.245.

251) Lindsay, 1838, vol. I, p.254.

252) Lindsay, 1838, vol. I, pp.256－257. （ ）内は著者自らのもの。

253) Lindsay, 1838, vol. I, pp.258－259.

254) Stephens, 1877, p.446.

255) Gaury, 1972, p.101.

256) cf. Landow, 1982, p.40.

257) 以下, Palgrave, 1865, pp.407－411.

258) Palgrave, 1865, p.411.